『勝　海舟の嫁　クララの明治日記』について

――人物記載のあり方の検討を通して――

野口武司

一

中公文庫に収められているクララ・ホイットニーの『勝　海舟の嫁　クララの明治日記』（以下、これを『日記』と略称する。）について、その記載内容の特色はもとよりのこと、ホイットニー一家が故丘の美国より明治八年に訪日するに至った経緯、訪日後における同家の人々の、生活状態、周囲の人々とのさまざまな出会い、とりわけ同家の人々を陰に陽に物心両面から支援した勝氏をはじめとする諸氏との交流の様子、等々については、『日記』の代表訳者である一又民子氏の、巻頭部に添えられている「はしがき」によってよく知ることができる。

『日記』は、記主たるクララが十五歳を迎える直前の、明治八年八月三日の横浜到着を記す当日条より始まり、「今日は最愛の母の命日である。私たちが母を視界の外に葬ってから四年目である。朝早くお墓に花を飾るために青山墓地に出かけた。（中略）私自身が母になったので、一層母の気持ちを感じることができる。そして母の言った多くのことを今思い出し、多少共感をもち、そしてそれは新しい意味をもって私に迫る。私の母性が私を一層母に近づける。どうぞ私も母と同じくらいよい母親になれますように。そして私の亡きあと同じように惜しまれますように、神様のお助け

を祈ります。」云々とある明治二十年四月十七日条の記事を以って終わっている。従って『日記』は、明治八年の起筆より同二十年の擱筆までの通算十年間（起筆年次から擱筆年次の十三年間中、一四・一八・一九の三年間に限り記事を闕いている。）分の記事を有しているが、いまその記載分量について眺めてみるに、

〔記載年次〕	〔使用行数〕	〔十年間分全体の記載分量に占める百分比〕	〔記載分量優越順位〕
明治八年	一二三九行	七、三％	5
九年	二九三五行	一七、二％	3
一〇年	二三三五行	一三、七％	4
一一年	三八八二行	二二、八％	2
一二年	四三二三行	二五、四％	1
一三年	五〇八行	三、〇％	8
一五年	三七行	〇、二％	9
一六年	九九五行	五、八％	6
一七年	七六七行	四、五％	7
二〇年	二五行	〇、一％	10

となって、明治十二年が分量的に最も豊かさを有していることと、この明治十二年を含めたそれ以前の五年間と、十三年以降の五年間を比較してみると、先の五年間の方が後の五年間よりも遥かに優越していることとを知りうる。これは、ホイットニー一家が経済的に困窮し、またウィリス（『日記』記主クララ令兄）の医学完成のためもあって、一家を挙げて十三年一月に美国へ帰還した後、やがてまた、その翌々十五年十一月に、日本でキリスト教を伝道するととも

に、一通り医学を修め得た息子ウィリスをクリスチャンドクターとして日本で活動させたいとの令母アンナの強い希望により、再来日を果たしているという事情を考慮すれば、容易に首肯しうる事象であろう。而してこの年次別に眺めてみた記載分量をば、さらに日条別の単位にまで推し広めて、一つの目安として一〇〇行以上費やされている日条事例のすべてを、使用行数の卓越する順次に随って列記すれば、凡そ次のようになる。

〔使用行数〕	〔日条事例〕
三一六行	一六年　四月三〇日条
一九九行	一〇年　五月一八日条
一三一行	一一年　六月二二日条
一二一行	一〇年　二月一七日条
一一八行	一一年　三月一二日条
一一八行	一二年　八月二八日条
一一一行	一二年　八月二五日条
一〇九行	一〇年一一月三〇日条
一〇九行	一一年　三月一五日条
一〇五行	九年一一月　三日条
一〇五行	一二年一一月　九日条

これにより、日条別使用行数の優越順次において、首位にある十六年四月三十日条の一事例を除けば、他はすべて、先述したように年度別で優越する十二年以前の年次に集中している記載事実を指摘しうる。而してこの唯一の例外日条

こそ、先に引用した『日記』の擱筆記事にみる、クララの敬慕して已まない、その令母アンナの逝去を回顧して、「ああ、生きながらえて今日の日を見ようとは！しかしこれが現実なのだ。私は今日は孤児として日記をつけなければならない。まるで恐ろしい悪夢を見ているようだ」云々との書き出しを以て綴られている日条に他ならないのである。これに加えて『日記』に登場する一千有余名の人物（固有名を有する者の他、官職名などで、該人物の特定可能な者をも含む。）中、五三二頁にも亘って所見されるというように、某人物の所見頁数の上において最も卓越する（これは、『日記』の総頁数（一一一三頁）の約四八％を占めているので、約二頁に一回近くの割合で所見されるという勘定になる。）のが、やはりそうしたクララの令母アンナであることをも併考するならば、件の令母アンナの存在が『日記』にいかに大きく、且つ強く映し出されているかを改めてよく理会しうるのである。

二

先に『日記』に記されているところについて若干触れたが、その中の記載内容の特色として、次のように二つの点を挙げて、各々について極めて分かり易く述べられている。

私はこの『クララ日記』の内容を一読して驚いた。興味津々、読む者を飽かせぬ魅力があるのだ。まず第一に、日記はクララが十五歳を迎える直前（明治八年）に始まるが、純な少女の目に映じた、開国間もない日本の姿が見事に描きだされている。当時の風俗、市井の生活を知る上で貴重な記録といえよう。

第二に、登場人物がまことに豪華である。直接関係のある勝、ホイットニー両家は別として、外国人としては、東京、横浜在住の有名人で出てこないものはない。アメリカ公使のビンガム、イギリス公使のパークス、ヘボン式ローマ字で今も有名なドクター・ヘップバン、ボアソナード、フェノロサ、グラント将軍、日本人としては、福沢諭吉、森有礼、箕作秋坪、大鳥圭介、大山巌、富田鉄之助、宗教家としては、津田仙、新島襄、小崎弘道、さらに旧将軍家の徳川家達をはじめとして旧大名や華族たち、明治の偉人たちが登場するのである。

これら二つの点のうち、第一点目についての事例の若干を『日記』から採摭してみると、以下のようになろう。維新後の新生日本における諸種の改正・改革に伴う新規の諸施策・諸事業に関わることとして、例えば、「太政大臣、つまり総理大臣が一、六の休日をやめ、全官庁で日曜日を休日とするという布告を出した。」（明治9・3・14条）こと、「東京府は、東京の人々に、髪を洋風に切るようおふれを出した。」（明治9・6・28条）こと、そして明治十七年の六月十二日から十四日にかけて本邦で初めての慈善バザーが鹿鳴館で開催され、「精力的な日本の婦人方は品物を売って、総額一万円の純益をあげ」（明治17・7条《日付不詳》）るというように、これが成功裡に終了したことなどを示す記事。また一般庶民の日常生活、とりわけ金銭面での暮らし向きに直接関わる事例として、四月一日は「学童たちが大手を振って悪戯ができる日であると同時に、」（明治12・4・1条）この一日という日は、「掛け取りの日でもある。日本では月初めに精算するのが習慣で、車夫、料理人、八百屋、肉屋、洋服屋、洗濯屋と数えきれないほど来て、そのたびに財布が軽くなっていく。」（同日条）云々とあり、「訪問客は早くから来だしたが、掛け取りはもっと早かった。魚屋は午前三時に請求書を持ってやってきた。」（明治13・1・1条）云々とあるように、月初めには掛け取りが請求書を持参して精算が行なわれたことを示す記事。あるいはまた、或る事物の、その時々の流行、もしくはその流行の推移変遷を示す事例としては、黒いリボンのついた白い麦藁帽子が「今年東京の若者の間に大流行している」（明治10・7・21条）こと、「この頃月琴が大流行」（明治12・1・30条）していること、そして「私たちが東京に来たての頃は丸まげはすっかりすたっていて、誰もがかんざし一本でまげをとめる三輪（みつわ）を結っていた。かんざしも細長いものとか、鼈甲（べっこう）に金、珊瑚か琥珀に銀といった風に流行（はや）りが変わる。今大流行しているのは細い金かんざしだ。」（明治13・1・2条）などといった記事がある。

さらに礼儀・作法、風俗・習慣、保健・衛生、信仰・俗信などといった事柄に関わる事例のうち、礼儀・作法については、「日本人は天性洗練されていて、『礼儀作法の手引き』みたいな人々である。人のもてなし方をよく知っていて、

人をとても楽な気分にさせてくれる。だが、あの低いお辞儀には閉口だ。さよならを言う時、富田夫人は床に膝をつき、畳に額をすりつけていた。だが、アメリカの自由な娘が、そのように卑屈で屈辱的な習慣をどうして学べるだろう！だから私はアメリカ式に軽く会釈をし、アメリカの礼儀どおり元気に『サヨナラ』と言って、みんながまだほこりの中にひれ伏しているうちに人力車に乗ってしまった。見るとみんなまだひれ伏したままだったが、あまり気持ちのよいものではない。」（明治8・10・15条）とあり、「ああ、日本人同士のお辞儀ったら――皆、床に頭がくっつくまでお辞儀をしていておかしかった。三浦夫人を見ていて、もう少しで声を立てて笑いそうになった。最初見た時、彼女は隅で立派なサムライに対し、頭を飛び切り深く下げていた。まるで彼にあらゆる幸福と永遠の生と死後は天国に行けることを祈ったかのように、長い間お辞儀をしたあと、サムライが立ち上がって去ると、『さらに征服すべき世界』はないかと見まわした。富田夫人と頭を突き合わせんばかりにお辞儀をしていた別の日本人が三浦夫人を見つけると両者はにじり寄り、二人とも手と膝をついて頭を床にくっつけ、ふたたびひれ伏した。だが、松平家の老婦人が入っていらっしゃると、もっとひどくなった。三浦夫人は鉄板上のパンケーキ〈私の例は、近ごろ皆家事に関係のあることになってしまう！〉のように、ぺしゃんこになった。」（明治9・4・7条）とある記事。

風俗・習慣については、今日（紀元節）は「大変めでたい祭日なので、宮中に参内する日本の上流社会のお偉方に出会ったが、その様子は描写しておく価値があるだろう。」（明治9・2・11条）として「参内日の政府官僚の揃いの服装は黒ラシャのズボンに燕尾服とシルクハットであるが、ポケットに手を突っ込み、いかめしいシルクハットを歪めてかぶって、ゆっくりと歩いている人もいれば、とても偉そうな顔をして、さっそうと歩きながら、ああ、なんということだろう、チョッキとズボンの間があき過ぎて、それにズボン吊りなどめったに着用しないものだから、純白な〈？〉シャツがはみ出している人もいた。カラーやカフスのない人もいたが、これがないということは、社交服としてはもっとひどく目立つこ

となのである。」（同日条）とあり、「日本人の下っ端役人の正装は実に滑稽である。ズボン吊りをつけていないので、燕尾服の前と、ズボンの間が広くあいていて、そこに一丈もある白か青の縮緬（ちりめん）の帯を、体にぐるぐる捲きつけている。シルクハットは絶対不可欠だが、大体大き過ぎて重過ぎるので、ひどくかぶり心地が悪そうだ。」（明治11・3010条）とあって、上下両階級に所属する諸役人の服装・服飾のあり様を示す記事。「大掃除の時に大名屋敷で行なわれる奇妙な習慣」（明治12・2311条）として、勝家の大掃除の日に、『日記』の記主クララが実際目にした「女中たちが一人の青年を選んで胴上げするのである。一人の女中がこの男性の袖に手をかけると、これを合図に元気の良い女中たちが、笑いながら彼に向かって突撃し、逃げる間もなく彼は高々と胴上げされてしまう。そうして床の上にどたりと落とす。起き上がるとまた襲撃される。」（同日条）ということを示す記事。あるいは、おかめの顔の輪郭だけが描かれていて、その「目、眉、鼻、口はばらばらに切り離されていて、一人が目隠しされてその顔の上に、ばらばらの切れ端を正しい位置に並べる」（明治1・1910条）「おかめ」遊びや、「親指、人差指、小指はそれぞれ蛙、蛇、ナメクジで、蛙は蛇、蛇はナメクジ、ナメクジは蛙に負ける。向きあって手を袖の中に入れて、一・二・三のかわりに「シ」と言って、同時に指をどれか出して」（明治12・4・2条）勝ち敗けを決める「虫拳」遊びが巷間に広く行なわれていたことを示す記事などがある。

保健・衛生、信仰・俗信については、「日本人は肺の病気や気管支炎に悩まされがちだったが、それは彼らの着物がぴったりしていないからだと思う。ほかの病気より風邪や結核で死ぬ人のほうが多い。着物は男物も女物もとてもゆるやかにできている。袖は長くてひらりと垂れているが、有害なのは腋（わき）の下の大きなすき間だ。そこから冷たい、身を切るような風が入って脇腹に当たるのである。それから着物を体に巻きつけて重ねる前の部分にもすき間がある。男の着物ではほとんど腰までずっと前があいている。女の人のも同様で、強制的に着用することになっている腰巻きのほかは、〈一般的に〉下に何も身につけていない。私が教えている男の人は、このような服装をしている。ストーブが必要な一

番寒い季節でさえ、袖をひらひらさせ、胸をあらわにしてやって来る。早死にするかもしれない危険を冒しているのを全く知らないのだ。いくらなめらかでつやつやしていようと、肌をあらわにしているさまは外国人にとって不愉快なものだが、日本人はそんな皮膚を隠すのは残念だとでも思っているのだろうか！着物の下の部分は、留めるピンもボタンもなくて開いたままになっているから、歩くと、特に若者が大股で歩くと、ぱっとあいたり閉じたりして、格好のよい脚と足先が時々見えるのである。日本人の衣類はこのように風通しがよいから、死に神がそんなに早く多くの人を襲っても不思議ではないのだ。」（明治8・11・5条）とあり、「今これ〔コレラ〕と同じ恐ろしい病気が東京に向かっているというので、皆大変心配している。日本はこのような病気にはうってつけの場所だ。というのは、日本人は体や家は非常に清潔にしているけれども、疫病を育てるのに最適な下水や便所が至るところにあるからである。首都ではすごい勢いで広がることだろう。」（明治10・8・6条〔〕内引用者補）とあり、そして上に引用した記事中にみる「コレラ」が、一旦猖獗を極め、蔓延してしまった時の対処法如何を示す「今築地の小田原町界隈ではコレラが大流行していて、多くの家が竹垣で囲まれ、『コレラ厄ばらい』と書いた黄色い紙が戸に貼ってあった。」（明治12・8・7条圏点引用者補）という記事や、楽士と舞子が向島枕橋の「八百松楼」に呼ばれて、ここで「ヤオマツヤといって、蔓延して来たコレラを防ぐために特別なマツリを行なっているのだそうだ。それは、宗教的な儀式というより祭のように見えた。この踊りと音楽は、神々を喜ばせ、疫病という神々の怒りの矢をそらせるためだそうだ。」（明治12・9・3条）という記事などがある。ところで、この「コレラ」対処法が示されている両記事のうち、とくに後者のそれについて、『日記』の記主クララは、「人の運命を司る偉大な支配者が、自分とまったく同じである、つまり華やかな情景や幼稚な演技を見て喜ぶだろうと考えるなんて、人の心はなんとばかげていることか！」（同日条）との冷ややかな感慨を吐露している。もともと、こうした二つの記事にみられる「コレラ」対処法は、その本質において呪術的な俗信を基底にした営為に他ならないので、この点では、そうした事柄は、クララが

「大の仲良し」（明治9・12・4条）であった勝家の女性お逸から直接聞かされ知った「子供の歯が抜けるか抜くかすると、それが下あごの歯ならば、新しい歯が上に向かって生えるように家の屋根の上に投げ上げ、上の歯ならば、新しい歯が下に向かって生えるように家の下に埋める」（明治10・6・7条）ようにすること、「若い人が急須（きゅうす）の口から飲むと、生まれる子供の口が急須の口のような形になるという」（同日条）こと、「若い婦人は結婚式の日に雨が降るといけないから、赤飯にお茶をかけないようにする」（同日条）こと、「子供がからすの「カーカー」という鳴き声を真似すると、口からくちばしが生えるか、口のすみに角のようなものができてくると言われ」（同日条）ていること、「申（さる）の日に髪の毛を切ると髪が赤くなる。火鉢の上で爪を切ると困ったことが起こる。例えば、夜だったら猫の爪が生えてくる。死人は北向きに寝かせるから、東か西に枕を向けて寝なくてはいけない。犬が夜吠えたら近所に死人が出る。」（同日条）等々といった事柄と相通ずるところのあることを認めうるので、こうした事例のすべてを「信仰・俗信」という範疇で把捉しても何ら差し支えなかろうと思う。

以上、『日記』の記載内容の特色として、その「はしがき」に述べられているところを、関係諸記事を掲記してやゝ詳しく見てきたが、この他、件の『日記』には、世上騒然となった大事件・大事故の経緯・顚末・状況などを詳密、且つ精細に描出した記事も亦、幾例か所見されるのである。いま、そのうちのめぼしい事例を若干挙げれば、㊀明治十一年五月十四日に勃発した紀尾井町での内務卿大久保利通公暗殺事件、㊁同年八月二十三日に惹起した近衛砲兵隊による所謂竹橋騒動、そして㊂翌十二年十二月二十五日に発生し、築地一帯を全焼した火災、等についての記事があり、㊀が一六行、㊁が二八行、そして㊂が五九行というように各々多くの紙幅を費やして精彩ある筆致で事細かに記し留められている。而してこれらの諸記事も亦、これまでに取り上げてきた諸種の記事の場合に斉しく、基本的には、「この日記帳は専ら身近な出来事を書いたほうがよさそうだ」（明治9・6・13条圏点引用者補）とする考え方に基拠して物されているのである。

三

次は、『日記』の記載内容の特色の第二点目として挙げられている、登場人物の豊富さという事柄についてである。前述のように『日記』には千有余名の人物が登場するが、これらの人物のうち、㈠その人物ならではの容貌・風体及び可視的な挙措・態度、印象・雰囲気などといった事柄に関わる記載を有する人物、㈡その人物ならではの言語・音声・声容・声調・口調・話法・話術・弁舌などといった事柄に関わる記載を有する人物、を各々摘出して、これら㈠㈡の双方、ないしは一方の記載を有する人物の員数を精査してみると、都盧三四四名を数える。而してこうした人物の記載の有り様を検覈し、討究することにより、『日記』における人物記載についての実態をより詳細・精確に明らめうるとともに、『日記』の性格の一斑をもより闡明しうると思う。これが本稿執筆の目途とする攸である。先ず煩を厭わずに、それら㈠㈡の双方、ないしは一方の事柄に関わる記載を有する各人物毎の該当個条を、以下に試みる論述の必要範囲内において適宜抜載することから始めよう。ここに掲げる人物群の中には、各界の第一線で活躍した著名者が許多含まれているので、この意味でも、当該記載は、記録資料としても極めて有益、且つ有用で、それなりの価値と意義とを有するものといえよう（各人物毎の記載中に付記されている傍〇印部分は前掲㈠、傍△印部分は前掲㈡、の各々に該当する箇所であることを表わし、各記載の下の数字及び上・下の文字は、その所在年・月・日条と、中公文庫本の巻次及び頁数とを各々示すものである。）。

(1) 赤井

。次のプログラムは大変豪華な日本食のご馳走で、これは小さい漆塗のお盆や、凝った瀬戸物の器に盛られていた。食事中は、女性歌手がこの会のために頼まれて来ていて、得意の歌をうたった。それがとても上手だったので終わった時、赤井氏は「ウマイネ！よい声だ。ちょうど男の声のようだ！」と叫んだ。[1]△△△ 歌手は拍手喝采に感激し、引き下がった。宴と踊りは八時まで続き、そのころになると、出席していた数人の紳士にお酒がきいてきた。赤井氏は、長い煙管（キセル）の先からゆっくりのぼる煙につつまれて、ひとりで歌いはじめた。あまり陽気になったので、とうとう婦人と子息がだまし、すかして連れ去ってしまった。赤井氏は[1]○○○○○○○○○○腕を傲慢そうに組み、威

○○厳をもって、しかしややよろめきながら部屋を出て行った。　16・11・24条　下497

（2）アストン、ウィリアムG（英国公使館書記官）　（3）同夫人

。今朝はアディを連れて、英国大使館まで歩き、図書館でアストン氏にあった。[2]背が高く、黒い縮れ毛に、精悍な口ひげ、黒くキラキラした目をしたハンサムな人だ。まるでスペイン人のようで、私が入ってきたので戸口のところにさっと立った時は、ほんとうにそうかと思ったほどだった。私たちを煖炉の近くの席に坐らせて、事務室の方に行っている間は、書斎をどうぞ使ってくださいとおっしゃった。お邪魔をしたのではと言うと、いや、ちょうど書きものを終えたところですとおっしゃった。やがて[3]ブロンドで背が高くものうげなアストン夫人が入ってきて、もうメイエ夫人が戻ってきているので、わざわざ遠いところをご面倒かけたくないといい、それから[3]さもものうげに二言、三言お愛想を言った。私はなぜかひどく腹が立った。　12・11・8条　下343

（4）アーネスト——→（266）ベイリー、チャールスW（海軍兵学校教官）夫人

。午前中には三河台のベイリー夫人を訪問した。（中略）ベイリー夫人が歓迎してくださって、たびたび来るようにとおっしゃった。一番上のお子さんのリリーは、アディの新しい友達である。コニー、メイベル、アーネストもみんなかわいい子供たちだ。（336）（114）（310）（4）○○○○　12・2・3条　下144

（5）アマーマン（アメルマン）、ジェームスL（東京一致神学校教師・宣教師）令嬢ネリー

。ネリーはなかなかの人物だ。私にひまし油が好きになったと言った。お茶の時にクレッカー先生に、走るのが早いかときいた。先生は、お母さんに追いかけられた時には早かった、と言った。するとネリーは、クレッカー夫人に向かって「先生に追いかけられた時には早く走れる？」ときいた。彼女は私たちにしつこく「誰がボタンを持ってる？」というゲームをやらせようとした。モートン氏が弾いている時に「あの人うまいと思う？私は思わない」[5]ときこえるような声でささやいた。　11・10・29条　下78

（6）有栖川宮熾仁親王歡宮　（7）同妃殿下董子

。ちょうどその時妃殿下がお立ちになられ、[6]○○○○○○小ぶとりで小柄な夫君――皇族で皇位継承者であられる有栖川宮殿下のあとを足早について行かれた。　12・8・28条　下315

。私は[7]○○○○○やさしいお顔の有栖川宮妃殿下が大好きになった。この方はこの国の皇太子妃で、[7]○○○○○美しいお目をして、○○○○○○○楽しげな微笑をなさり、△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△うっとりするような英語をお話しになる。ドイツのデュルンドルフ伯爵夫人とたいそうお親しいようだった。　17・11・12条　下549

（8）アレグザンダー、トーマス・サロン（明治学院〈神学〉教師）――→（97）グリーン、ダニエルC（新約聖書翻訳委員・同志社大学教授・宣教師）

。宣教師のアレグザンダー氏は上手なお説教をしたが、[8][97]△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△話し方はグリーン氏にそっくりだ。プリンストンからみえる人は、みんな同じような説教の仕方をなさる。　11・2・10条　上481

（9）アレグザンダー、トーマス（工部大学校〈土木工学〉教師）――→（264）ペイトン（工部大学校関係者）

。今晩は、ディクソン氏のお友達のペイトン氏とアレグザンダー氏という変なお客があった。ペイトン氏は金髪青目[264]○○○○のハイランドの田舎青年で、バグパイプが吹け、バイオリンも「ピカ一」だ。[264]○○○○○○全体に静かな人で、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○一張羅を着た機械工を思わせるが、むろんこれは第一印象にすぎない。アレグザンダー氏のほうは[9]貧相な教授風の人で、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○もじゃもじゃの長い茶色の髭、赤い目、それに真っ赤な団子鼻〈ただしこれは丹毒のせいかもしれない〉をしている。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○とても強い訛りがあり、静かで時々ほかのことを考えているようにみえるが、[9]うまい冗談や洒落も言う。特に文学とケルト人やスコットランド人の歴史には詳しいようだ。スコットランドの景色の話となると、[9]がぜん流暢になる。持参のバイオリンにまったく夢中で、胸をしめつけられるような曲を弾いた。　12・4・30条　下200

(10) アンガス、ウィリアムM（工部大学校〈土木工学・測量術〉教師）――→(274) ヘルム、アドルフ（開成学校・官立外国語学校〈ドイツ語〉教師）

○二回目のドイツ語のレッスンが今日の午後にあった。ヘルム先生は少し早く来られ、アンガス氏とウィリイはいっしょに来た。（中略）[10]アンガス氏の発音はひどいものだ。耳が少し遠いので、正確な音が聞こえないのだ。授業が終わると、ヘルム先生はドイツ語で「お嬢さん、疲れましたか」と私に聞かれた。私は意味がわかったのにびっくりして「ノー」と英語で答えると、[274]先生は顔をしかめられた。そこで勇気を奮ってドイツ語で「いいえ、先生。先生はお疲れではありませんか」と答えた。すると先生はアンガス氏に「君は悪い人か」と聞かれた。[10]アンガス氏はむっとして、英語とドイツ語をまぜこぜにして、「僕は悪い人ではない」と返答した。授業は勉強と遊びをいっしょにしたようで面白かったが、先生はその気になればとても意地が悪くなる人ではないかと思う。

12・10・2条　下330

(11) イズブキ（通訳）

○今夜の会はとてもよかった。フレージャー氏が話をしに来てくださった。ビンガム夫人がみえ、勝氏までいらっしゃった。フレージャー氏は短い良い話をしてくださり、[11]イズブキ氏が身振りや強調の仕方にいたるまで実に正確に、逐語訳してくださった。彼はフォールズ博士の通訳としてかなり前から講演などに出ており、まったく天才的だ。

12・7・7条　下257

(12) 伊勢（横井）時雄（キリスト教伝道者）――→(13) イービー、チャールスS（中央会堂創設者・宣教師）　(305) 宮川経輝（キリスト教伝道者）

○今日は日本福音伝道会の閉会式が行なわれたが、そこで面白い光景を見た。（中略）私たちが入って行った時はウォデル氏が話をしていて聴衆は夢中になっていた。演説者が何人もつづき、その中にイービー氏、ヴァーベック氏、伊勢（時雄）氏、大阪の宮川（経輝）氏、そのほか私の知らない人がいた。イービー氏はあまり興奮して夢中になり、[13]聞きづらいほどの大声で話した。しかし、彼の

話は聴衆の心に深く訴えるようであった。（中略）伊勢氏の演説は非常に個人的で、大部分の聴衆から反感を買った。そして救済の計画について話し出した時、「イヤ！イヤ！」という叫びと、手をはげしく打ちならす音でその声はかき消されてしまった。伊勢氏は辛抱づよく待ったが、はじめようとするといつも声がかき消されてしまった。幾度か試みたが駄目でとうとうただ頭を下げ祈りを始めた。すると突然しんと静まりかえり、伊勢氏は人々の心に深く訴えるように熱心に祈った。(12)誠に上品に、熱心に、雄弁に祈ったので、誰も彼も驚き、だれ一人としてその邪魔をする者はいなかった。伊勢氏は京都の人で、日本人の説教者の中では一番の精神主義者だと考えられている。(305)宮川氏もたいそう雄弁なので人気があり、立ち上がると盛んな拍手で迎えられた。(305)宮川氏は背が低くやせていて黒々としたあごひげがあり、ほっそりしたきゃしゃな手を使い、いとも上品な手ぶりで話をする。とても雄弁で言葉がすらすらと口をついて出て来て、その熱烈さは会衆一同を引きつけた。　16・5・18条　下478 479

(13) イービー、チャールスS（中央会堂創設者・宣教師）――→(12) 伊勢（横井）時雄（キリスト教伝道者）

(14) 岩田通徳（日本音楽学校主）――→(26) 上　真行　(83) 河村（笙演奏家）　(141) 柴田（一等伶人、芝葛鎮カ）　(205) 東儀季熙

。一日中準備をしていた音楽会がすばらしくうまくいった。ご招待してあった滝村氏と岩田（通徳）氏がみえて、五、六カ所から別々に届けられた楽器をうちの客間に用意された。やがて銅鑼（どら）が鳴ってほかの六人の音楽家がみえた。皆さん立派な和服姿で礼儀正しく、紳士的であった。(14)獅子のような顔に白髪のひげを生やした岩田氏、琴を弾く教授のような感じの紳士、(205)大きな声に派手な身振りの滑稽な小柄の東儀氏、前に私の注目を引いた(141)すばらしいテノールの持主である柴田（一等伶人、芝葛鎮カ）氏、みなさんが上（うえ）と呼んでいる笛の名人の(26)丈の高い立派な顔の方などがみえていた。このほかに名前を存じあげない方が二、三人みえた。それから河村氏という笙の演奏者で、(83)いつもしかめっ面をしているおかしな方もおいでになった。　12・1・25条　下137

(15) インブリー、ウィリアム（東京一致神学校教師・宣教師）――→(56) 奥野昌綱（東京一致神学校聴講生）

◦次にインブリー氏が、[15]場馴れのした雄弁な口調で会衆を代表して先生に御礼を申し上げた。それは私たちの敬愛する牧師に対する[15]感動的な讃辞であった。ヴィーダー先生はあした出発され、インドとヨーロッパをまわって帰国される。

11・10・27条　下72

◦インブリー氏がマリアの人となりと、キリストの幼年時代について、クリスマスの説教をなさったが、[15]言葉遣いがすばらしく上手だった。

12・12・21条　下384

◦お葬式では、誰も彼もとても親切にしてくださった。（中略）奥野（昌綱）氏は日本語で[56]感動的なスピーチをし、私は出席していた数百人の日本人の多くが感銘を受けてほしいと願った。インブリー氏は短いが[15]人の心を打つような言葉を述べ、皆は、日本語で歌った。それから、母を外に運び出した。

16・4・30条　下469

(16) ヴァーベック（フルベッキ）、ギドーH・F（開成学校教養学科教師・宣教師）　(17) 同令嬢エマ　(18) 同令嬢アニー

(19) 同令息チャニング　(20) 同令息ウィリイ──→(58) オシリア（ゴーブル、ジョナサン令嬢）　(110) コクラン（カックラン）、ジョージL（旧約聖書翻訳委員・東洋英和学校設立者・宣教師）　(111) 同夫人　(112) 同令嬢スージー

(130) ジェシー（フェントン、ジョンW《海軍軍楽隊指導者・初代「君が代」作曲者》令嬢）　(236) バチェルダー、ジョージ

(308) メアリ（ゴーブル、ジョナサン令嬢）

◦ヴァーベック家のエマとウィリイとジョージ・バチェルダーとジェシー・フェントンと私は、外のきれいな小さい円卓を囲んでとても楽しく過ごし、アイスクリームをたくさんいただき、[17][20][236][130]よく笑った。

9・7・4条　上214

◦スージーに招待されていたので、二時にケーキを焼き終わってからアディとコクラン家へ行った。スージーは駿河台に住んでいる。ちょうど私と同じくらいの年で、二、三ヵ月私より下だと言うが、[112]動作は私よりおとなびている。コクラン氏はカナダの宣教師で、

自分たちのことをイギリス人だとおっしゃるが、[110]アクセントや態度などから見ると明らかにアメリカ人である。今住んでおられるところは、日本人の建てた家で、あまりいい家ではないが、やがて築地に越すつもりだと言われる。お子さんはスージー十六歳、ジョージ十三歳、モード九歳の三人で、アディとモードは大の仲好し、スージーと私はお互いにあまり好きではないが、とてもいい友達だ。スージーと私は五時に、近くに住んでいるエマ・ヴァーベックの家を訪ねた。エマは[17]いつもの落ち着いた無頓着な表情で戸をあけたが、私を見ると飛び出して来て、「まあ、クララ、あなたが来るとは思わなかったわ」と言いながら私を家に引っ張り込んだ。客間に行って、五十個ぐらいはある茶瓶の収集を見せてもらった。（中略）コクラン家で夕食の時燻製の牛肉が出たが、フォークがなかった。私のうちではいつも食卓にフォークが置いてある。アディはわけがわからず、フォークは使わないの、と無邪気に尋ねたので私は恥ずかしかった。「ええ、時々使いますよ」とコクラン夫人はおっしゃったが、[11]少しむっとしておられた。

9・7・10条　上217 218

。エマ・ヴァーベックが馬車でやって来て、ジェシー・フェントンを訪ねようと誘った。弟のチャニングと別当もいっしょだった。馬車は快適で、三時半に芝三十三番地に着いた。エマは「おジョシーさんいますか」と言って自分の名前を[17]フドルベック（フルベッキ）サンだと告げた。それがヴァーベックの日本風の発音だという。エマがまじめくさってこのおどけた名前をいうので、笑わずにはいられなかった。

9・10・21条　上257

。ジェシーは家にいた。フェントン夫人に挨拶をしてから、庭に出てクローケーをした。チャニングも加わって、いっしょに数回ゲームをした。それから五時半まで鬼ごっこや隠れんぼをして遊んだ。家に入ると、ジェシーがシャンパン用のコップを持って来てから部屋を出て行ったので、エマが「これで何を飲むのかしら」と言うと、チャニングが「僕飲めないよ！」と言い、クララは「私もよ」と言った。私たちが闘志を燃やし始めた時、ジェシーがレモネードの瓶を持って入ってきた！私たちは[17][19]わっと笑い出し、ジェシーは

きょとんとして――でも、説明する気にはなれなかった！フェントン氏の家はとても気持ちのよい大名屋敷である。帰り道ずっとエマは上機嫌だったが、老馬が走り出すのではないかとひどくこわがっていた。馬がぐんと引っ張ったり、普通より早く駆けたりするたびに私の腕をつかみ、馬が暴走したら飛び出せるように、片足を外に出しておきなさいと言った。別当が馬の頭のところにいていっしょに走っているのに、[17]○○○○○○○○○○びくびくしっぱなしだった。チャニングと私はそんなエマを見て笑って[19]○○○○○○しまった。

9・10・21条　上258

。ヴァーベック家では毎年三本ツリーを飾る――一本は家族のため、一本は日本人のため、一本は外国人のためである。さだめし大変であろう。でも今日はとても楽しかった。女の子たちがそろっていた――ジェニーにガシーにユウメイと横浜から来たオシリアとメアリ・ゴーブルという二人。この二人は、はじめとてもおとなしかったが、[58][308]○○○かわいい良い子たちだった。大人の人も数人いた。エマはお父様とドイツの歌を合唱した。ことばはわからなかったが、[17]△△節は感動的だった。

10・12・27条　上449

。ヴァーベック一家が帰国されると聞いたので、授業が終わってから母と挨拶にいった。まず最初にダイヴァーズ夫人のところに寄ったがお留守だった。母は次にミス・キダーのところに寄って、私は先にエマのところへ行った。エマは[17]△△△△△△△△△△大はしゃぎでおしゃべり△△△をした。カリフォルニアのどこかに住む予定だそうで、一ヵ月以内に発つということだ。エマはとても面白い人なので行ってしまうのは淋しい。

11・2・22条　上494

。昼食の時に、マッカーティ夫人からのメモが届いて、ヴィーダ家で集会があるということだったので、一時半までに支度をすませた。ユウメイが誘いに来てくれて、二人で元気よく加賀屋敷へ出かけていった。私たちが一番乗りだったが、大変歓迎された。エマとアニーとジョージとウィリイが相次いで姿を見せて賑やかなグループになった。私は自分の悲しみも忘れ、他人を笑わせ、自分も大いに笑った。まじめ一点ばりのアニーまでしまいには[18]○○○○笑い出した。

11・4・11条　上523

。ちょっとしたことですぐ腹を立てるウィリイについて、エマと私は長いこと話し合った。エマは変わった子で、ガシーがふざけち

らしても[17]平○○○気な顔をしている。小さい男の子には慣れていて、なんとでもできると思っているようだ。

11・5・2条　上535

。ウィリイはフロックコートを着た洗練された格好の同年輩の青年と並ぶと、[20]長い脚に大きい足、短いジャケツでとても奇妙にみえるそうだ。

11・9・24条　下49

。日本橋に大火（箔屋町よりひる頃出火）が起きて、日本橋と京橋の間のあたり一帯を焼いたばかりでなく、強い風にあおられて火は東京湾のほうにまでのびて築地はほとんど全焼してしまった。（中略）ヴァーベック氏（一八七八年に一時帰国したが後に再来日した）が命びろいしたのは本当によかった。この金曜日にたくさんの人が圧死したのだが、彼も橋の上で群衆に巻きこまれて圧しつぶされて死にそうになった。ちょうどその時胸のポケットに入れておいた勲章（勲三等旭日章）のことを思い出し、日の出のマークがついた勲章を取り出し頭上高くさしあげた。まわりの人たちより[16]頭一つ背が高かったので、出動していた警官たちは光っているマークを見て、すぐに天皇陛下の印とわかった。そこでヴァーベック氏を力まかせにひっこ抜いた。押してくる人々の頭の上から屈強な男が五、六人で力いっぱい引っぱったので、彼の靴と靴下は脱げてしまった。このように、勲章のおかげで大切な生命が助かった。

12・12・27条　下395

。祈禱会には大勢の人たちが参加した。ヴァーベック氏が会のリーダーとして来られ、キリストの奇蹟を主題にとられた。ヴァーベック氏は[16]日本語が本当に上手で、英語とまったく同じように日本語を話す。言葉は丁寧で、日本人とまったく同じ語調や熟語を使う。本当に彼ほど流暢に正確な日本語で話ができる外国人は見たことがない。

12・12・28条　下396

（21）ヴァン・ビューレン、トーマスB（神奈川総領事・将軍）――→（130）ジェシー（フェントン、ジョンW《海軍軍楽隊指導者・初代「君が代」作曲者》令嬢）

。ヴァン・ビューレン総領事は、[21]活気にあふれたすばらしい挨拶の言葉を述べ、それからスミス氏が短い演説をしている時、楽隊が「朝まで戻るまい」を演奏し始めて、スミス氏をまごつかせた。楽長はジェシーの弟子なので、[130]日本人のように日本語をしゃべるジェシーは、楽隊に演奏をやめるよう言い続けなければならなかった。ジェシーは十三歳なのに年よりずっと大きく見える。

9・7・4条　上214

。次に独立記念日を祝って乾盃し、来賓のアメリカ総領事ヴァン・ビューレン氏がそれに応じてグラント将軍の偉大さとわが祖国について、[21]滔々たる演説をなさった。私は教会での説教しか聞いたことがなかったので、ヴァン・ビューレン氏のほとばしるような雄弁ぶりにすっかり夢中になってしまった。[21]大変威厳のある品の良い感じで、雪のように白く長い顎ひげ、幅広の肩にカールした白い髪がたれかかり、深い黒い目は鋭いがやさしそうで、男らしいしっかりした足どり、声は力強く極めて音楽的だ。だが――書いてもよいだろうか？このすばらしい人は、外見とは裏腹に道徳的に堕落していて、しばしば大酒を飲んでけだものとなり果てるのだ。ほんとうに矛盾そのものの人で、紳士的で礼儀正しいと同時に粗野で凶暴なごろつきであり、みかけはすばらしいが、中は腐っているのだ。ヴァン・ビューレン氏は[21]生まれついての弁舌家で、ユーモアとペーソス、宗教と愛国心を効果的にまぜあわせる術をよく知っている。聴衆の反応は見ていると奇妙だった。今笑いころげていたかと思うと、はるかかなたの故郷や、すでに逝ってしまった愛する人々を思い起こして目に涙を浮かべ胸が塞がるようになったり、祖国を困難からお救いになった神のことを、[21]おさえた調子の深い音楽的な声で語ると、人々は自ずと頭を垂れ、またなにか愛国心を煽るようなことを言うと拍手喝采になるのだった。とてもすばらしい演説で、食事やそのあとのダンスと同じくらい楽しかった。

12・7・5条　下249 250

(22) ヴィーダー、ピーターV（開成学校・東京大学〈物理学・数学〉教師）夫人（東京女学校教師）　(23) 同令嬢ガシー

(24) 同令嬢ジェニー――→(42) エルドレッド、カロラインE令嬢（宣教師）　(128) サットン、フレデリックW（海軍兵学

校教官・機関教授局管理者）令息フレディ　(169) ダイヴァーズ、エドワード（工部大学校・東京大学〈化学〉教師・アジア協会会長）令息フレッド　(198) ディクソン、ウィリアムG（工部大学校〈英語・英文学〉教師）　(236) バチェルダー、令息ジョージ　(261) ブラウアズ、トム　(326) ユウメイ（マッカーティ、ディビィB（開成学校〈英語・ラテン語・博物学〉教師・宣教師）養女金韵梅）

。杉田夫人が盛と六蔵とイノコを連れて訪ねて来られた。ユウメイと私はジェニーを見舞いに加賀屋敷に出かけた。ガシーは[23]大喜びで、ジェニー[24]もうれしそうだった。かわいそうに一月十二日以来床について治る見込みもないのだ。　11・3・23条　上516

。帰りに段々のところで人力車の来るのを待っている時に、フレッドがガシーの髪の毛をぎゅっと引っ張ったが、ガシーは平然としていた。「君の髪の毛はなんでできてるんだい？馬の毛？」とフレッドが聞いた。「そうよ。なんだと思ってた？」とガシーは尋ねた。「男の子の髪かと思ったよ」とフレッドは答えた。「男の子の髪は馬の毛でなくちゃ。痛くないようにね」とガシー。ガシーがフレッドの髪がなんでできているのか調べようとしたので、フレッドは逃げ出し、ガシーが追いかけた。[169][23]みんなが楽しそうな顔をして引き上げたのは六時半だった。　11・5・2条　上535

。ヴィーダー夫人は俗っぽい人で、ジェニーの症状を[22]大きな声でべらべらとしゃべって不愉快だった。夫人は[22]時々おなかが普段の二倍にも三倍にもふくれることがあるので、お茶は全然いただけないと言いながら、お茶碗になみなみと一杯召し上がった。　11・5・22条　上546

。ディクソン氏が私に本を渡された時に、ガシーが[23]意地悪い顔をちらっと私のほうに向けた。私はできるだけ大きい声を出して歌ったが、ミス・エルドレッドの[42]ラッパのような讃美の声に比べると、小さい鐘の音のようだった。　11・6・11条　上564 565

。みんなで体重を測りに税関へ行った。メイが八三ポンド、ジェニーが一〇三ポンド、ジョージが一二五ポンド、ガシーが一二〇ポンド、私が一〇五ポンドだった。[326][24][236][23]みんな重いので大笑いだったが、ガシーは一番若いのに[23]一番重くて一番背も高いので恥ずかしがっ

た。

。ディクソン氏は銀座まで歩かされ、帰り道もずっと歩かされた。すっかり「だまされ」た彼は、その晩中[198]不景気な顔で一度も笑わず、[24][23]かわいいジェニーやガシーにまでそっけない態度を取った。
11・9・24条　下49

11・10・3条　下57

。ディクソン氏は協会の書記なので、いろいろな方が話しかけるのを聞き終わってから、私たちは帰途についた。母が彼の腕によりかかり、私は母の横について歩いた。途中で付添いのいないジェニーとガシーを追い越したが、彼女たちは心もとない様子であったし、ディクソン氏が真っ白の手袋をはめた手で私を人力車に助け乗せてくれるのを見て、いく分妬ましくも思ったようだった。ガシーが私のうしろに来て、私の腕に手をかけ「木曜日にね」と[23]ささやいた。
11・10・8条　下62

(25) ウィニフレッド（クララ姻戚）

。今朝は疲れて遅く起きたが、服を着ながら、階下の小包が楽しみだった。（中略）特にうれしかったのは、セアラおばさんやいとこたちの写真だった。（中略）リビーおばさんの子供たちもとてもよく、オスカーはもう立派な若者、ドーラは[215]とてもきれいになり、おとなびてみえる。ベッシーは相変わらずお転婆娘で、グレーシーは[99]背は高くなったが変わっていない。ウィニフレッドは[25]パンパンに太った甘えん坊だ。
12・12・13条　下383

(26) 上　真行――→(14) 岩田通徳（日本音楽学校主）　(247) 疋田夫人（勝　安芳《海舟・安房守》次女・疋田正善夫人孝子《小太郎》）

。伊勢の海の歌だったが、笛を吹く人の親指があまりよくしなうので、疋田夫人は「指が曲がっているから悪人でしょ」と[247]ささやいた。笏拍手は背筋をぴんとのばし、目を閉じて、拍子を打つ時だけ手を動かした。[26]口を少しあけて坐っている姿は、口から水を出している河の神様みたいだと、ユーイング氏は言った。琴は天井を見つめ、音楽に埋没しているようだったが、ひちりきは頬をふくらまし、顔を真っ赤にして吹くので、恵比寿様か大黒様のようだった。[26]声のよい上（うえ）氏、それから知らないハンサムな青年もいた。

（27）上杉茂憲（侍従・伯爵）――→（180）竹下寅吉令妹　（184）種田誠一　（185）同夫人　（328）横山（美国聖公会宣教師）　12・4・10条　下178

。次に種田夫人、それから津田琴（仙の長女）さん、神田次郎氏が見えた。暫くしてから横山氏がみえたが、この方は、(328)△△△△△のべつ冗談△△△△△△△△△△△△△△△ばかり言っていた。(184)○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○学者らしい上品な身のこなしと、真面目で謹厳な表情の持主である種田氏は、ふざけている横山氏を不思議そうに見ておられたが、母に、「あの人は一体、誰ですか？日本人であんなことをする人は見たことがありませんな。どこかで見たアメリカ人のようです」と言われた。上杉氏も(27)批判的な顔つきで見ておいでになった。横山氏は女性のそばにくっついてみんなを笑わせるために、(328)くだらない冗談ばかりおっしゃっていた。上杉氏と婚約者のおひなさんとは、まるで見知らぬ他人のように、お互いにぜんぜん関心を示さなかった。まあ、ほんとうに日本人の恋人ったら！種田氏の若い奥様が、(185)上手に歌を歌ってくださった。（中略）竹下さんは帰りがけに「どうぞ遊びにいらしてください」と小声で(180)おっしゃった。　10・12・28条　上450 451

（28）上杉茂憲（侍従・伯爵）令母於磐

。今日上杉氏のお宅を訪ねた。麻布鳥居坂のきれいな大名屋敷（鳥居坂四、上杉邸）で、家からの眺望がすばらしい。大鳥氏のお嬢さんが上杉氏と結婚なさったらさぞうまくいくだろう。（中略）上杉氏はストウ夫人の本を貸してくださった。絵もお上手でいらっしゃる。お年を召したお父様と(28)きれいなお母様に紹介していただいたのち、上杉家を辞して、大鳥家に立ち寄った。　10・7・25条　上391

（29）上野栄三郎（商法学校教師）

。家に帰ってみたら母が二人の日本人の客の相手をしていた。一人は上野（栄三郎）氏で、もう一人は金沢からみえたご老人であった。この方は近く金沢へ帰られるので、ウィリイに紹介して欲しいということだった。上野氏は(29)歌うのがお上手で商法学校の有名な

先生である。　12・3・1条　下152

(30) 上野景範（英国駐在特命全権公使・外務大輔）　(31) 同夫人——→　(49) 大山巌（陸軍卿・陸軍中将）　(101) 黒田清隆（参議兼開拓長官・陸軍中将）　(118) 西郷従道（陸軍中将）　(222) 鍋島直大（元佐賀藩主・元老院議官）

。もとの部屋に戻ると、楽士は竹の笛を吹いていた。西郷、大山両中将、上野氏がうしろのほうに半円に立ち、一生懸命、椿の葉を吹いていたが、やっとキーキー不協和音を出すだけで、顔が真っ赤になるばかりだった。あとで加わられた鍋島公とこの紳士方でさんざん笑ったあとで、大山中将は独特のワルツのような足取りで私の長椅子のところに来られ、陽気にお話をなさった。お顔にはばたがあり、目はぎょろりとしていらっしゃるが、私はこの方がとても好きだ。背は高く、肩は広くにこやかで、誰とでも明るく話をなさり、男らしい態度である。天皇陛下から賜った勲章もお人柄に似つかわしく、立派に見えた。英語は話されないが、どんな不完全な日本語でお話ししても意味をとても早く理解なさる。西郷中将は、従弟の大山中将に較べて、お顔は立派だが、それほど善人ではないようだ。上野氏は輝く女王（ビクトリア女王）の勲章を胸につけて、きらびやかであった。開拓使の黒田（清隆、長官）氏によく似ている。上野氏の奥様は小柄な美人だ。紅海沿岸のアーデンで赤ちゃんを亡くされたそうだ。　12・8・28条　下315 316

(32) ウォデル、ヒュー（明治学院教師・宣教師）

。この晴れた朝、みんな、〈どういうわけか知らないが〉このごろめったに行かない父まで、教会に行った。ウォデル氏が、若さと健康と富と力を持っていながら、ある一つのものに欠けていた若い支配者を例にあげて説教された。その人は道徳律を厳格に守ったが、それでも満足は得られなかった。ウォデル氏は道徳と真の信仰との違いを感情を込めて説明なさったが、とても興味深かった。大勢の人が出席していた。　9・10・22条　上260

(33) ウォトソン

。きのう家に帰って来るとき、ウォトソンと言う立派な顔立ちの礼儀正しい紳士の被護の下におかれた。この方はヘップバン先生のお友達である。中原（国三郎）氏もいっしょで、東京まで楽しい旅であった。東京についてから、ウォトソン氏の人力車に乗せられて家に送り届けられた。　11・8・9条　下18

（34）ウォルター（クララ長男）

。この年月は何と長く、また変化に富んだものであったことか。今日私は一人で行ったのではなくて、かわいいウォルター坊やを連れて行った。この子は梅太郎と私の息子で、生後六ヵ月になる。私はとても自分が変わったように感じた。私自身が母親になり、母のお墓（青山墓地内、海舟書の聖句「骸化土、霊帰天」も刻まれている）に花を飾っている。　20・4・17条　下553

（35）内田きの——→（36）内田夫人（勝　安芳《海舟・安房守》長女夢《ゆめ》）　（54）岡田夫人つる　（71）お逸（勝安芳《海舟・安房守》三女逸子）　（153）杉田玄端（玄白猶子・元外国奉行支配翻訳御用頭取）夫人俊　（178）滝村鶴雄令母

。今日は日本人の老婦人ばかりのひどく奇妙なパーティーがあった。最年少は六十五歳、最年長は八十一歳で耳が聞こえないといった人たちであったが、とても楽しく、これほど満足な会はなかったと思うほどだった。（中略）招待したお客は杉田夫人、岡田夫人、内田夫人のおば様、と滝村氏の母堂。この方はこれまで見た日本人の老婦人の中で一番美しい。髪は雪のように白く黒目がち、肌はつややかで、老齢にもかかわらず背が並はずれて高く、腰も曲がっていない。私たちはみな床に坐って相槌を打ったり、噂話に耳を傾けたりした。めいめいが自分の年齢を言い、互いに髪、歯、目などを較べて、お世辞を言ったりした。内田夫人のおば様が「滝村様、おいくつでいらっしゃいますか」ときくと、「六十五でございます。もう年寄りでございますよ」と滝村老夫人。「おや、まあ、年寄りだなんておっしゃって。おぐしは白うございますが、大変お若くお見えでございますよ。髪は黒うございますが、私は八十一でございます。耳も聞こえませんし、目もほとんど駄目でございます。ほんに私のような用無しの年寄りは、足手まといになるだけ

でございますよ」「そのようなことはございません、おきの様。あまり物の役にはたちませんが、子供にとってはそばにいてもらうほうがよろしゅうございましょう」と滝村老夫人。（中略）それから話は歯の話になり、滝村老夫人は、[178]二本だけはグラグラしているが、あとはみなまだ丈夫だと言った。内田夫人のおば様は、[35]物を食べるとみなグラグラするという。岡田夫人は[54]自分の歯は四本しか残っていないという。食事は近くの茶屋からとりよせた和食でとても楽しかった。富田夫人、お逸、こまつも来て、食後にオレンジ・ゼリーとコーン・スターチ・プディングとを食べた。老婦人たちはとても珍しがって「今日はこんな珍しい物をいただいて、きっと長生きいたします」と言ったりした。（中略）どうぞ鶴と同じくらい長生きをしてくださいと言った。[153][54][35][178]皆大層喜んで、紫の座布団に坐ったまま深々とお辞儀をした。杉田夫人だけは紫座布団がたりないので、ソファーの厚いクッションに[153]ぎこちなく坐っておられた。食事が終わると、岡田夫人はこんな大層なご馳走は食べたことがない、おいしいものでおなかがいっぱいだ、もっと三倍も食べたいのだが年で駄目だ、若い時は一度にみかんを十五も食べられたが、今は三つがせいぜいだと言われた。私はこの善良な老婦人に写真をくださいと言ったが、彼女は[54]笑って、「私のひどい写真を、一体どうなさるおつもりですか。七郎はよく私に写真をとれと申しますが、私が死んだら、孫たちには話だけをしてくれればよいと言っております。みっともないおばあさんの写真なんぞを見れば、ばかにして、[54]『なんてひどい顔』と申しますでしょうから」私は笑って、それは違います。私は本当にあなたの写真が欲しいのですと言った。（中略）食後、私はオルガンを弾いてあげたが、これでまた七十五日長生きする訳である。内田夫人のおば様は、私の椅子に両腕をもたれかけてすわり、すっかり聞きほれたような様子で、「いいものですね、日本音楽よりよろしゅうございます」と何度も何度も言われた。それから歌を歌ってほしいというので、讃美歌を最初、英語で二、三曲歌い、次に日本語で歌った。内田夫人のおば様はとても喜んで覚えたいという。そこでお逸と私は彼女の耳もとで歌詞を[71]大声で繰り返したが、[36]どうしても「イエスを愛す」のかわりに「エシュあいこ」といい、一番の「帰スレバ子タチ」を「こたつ」という。ふるえ声をはりあげて私たちといっしょに歌うのがひどくおかしかった。でも、とても上手で皆にほめられた。

13・1・13条　下 415 416 417 418

(36) 内田夫人（勝　安芳《海舟・安房守》長女夢《ゆめ》）――→(35) 内田きの　(68) 勝　安芳（海舟・安房守）夫人たみ　(247) 勝　安芳（海舟・安房守）次女・疋田正善夫人孝子（小太郎）

。中島氏が愛について述べているコリント前書十三章を読まれた。中島氏は熱心に祈禱もなさった。この集会がみんなのためになりますように。内田夫人はよくわかったので今までのうちで一番良い会だったと言った。何か特に感心することがあると彼女は会の途中でも「(36)△△△△　△△△△△△△△なるほど」と声に出して言う。　12・3・30条　下161

。今日は、私の生涯でもっともつらい一日だった。父が発ったのだ。（中略）勝夫人、疋田夫人、内田夫人がお別れにこられた。内田夫人は「この世ではもうふたたびお目にかかれるとは思いませんが、天国でお目にかかれることを祈っております」と(36)涙○○○○○○をうかべて、別離を惜しまれ、私は心を打たれた。　12・12・12条　下380

。ヴァン・ペッテン夫人が来られ、私をその腕にだいてくださった。勝夫人、疋田夫人、内田夫人は(68)(247)(36)階下で泣○○き、祈っていらっ△△△△△△△△しゃったが、私はまるで石のようだった。私はトルー夫人にいわれて立ち上がり、母のきれいな下着を広げたが、なんら心のいたみも感じなかった。私は母の写真の前に坐って祈ろうとしたが、むだであることに気づいた。　16・4・30条　下466 467

。内田夫人のおば様が金曜日に亡くなられた。とても急で、病気になって二日か三日だった。おば様は八十五歳で、よくこう言っておられた。「私は年をとってしまって、耳も聞こえないし、歩きまわることもできません。身内も友達も皆死んでしまいました。私はただ待つばかりです」かわいそうに！とても信心深かったけれどキリスト教の信者になる気はない。起きると太陽を拝み、夕べには(35)大△△△△△△△△△△△△△△きい声で祈っているのをよく見かけた。このようなあわれな魂を神様はきっとお守りくださるに違いない。おば様はとても親切にしてくださった。母が亡くなった時、(35)ひどく泣○○○○○いて言われた。「なぜ代わりに私のところにお迎えがこなかったのでしょう。こんなおばあさんで役に立たないのに。お母様は若くて、あなたには大切な方なのに。これからは私がお母さんになってあげましょう」　17・2・2条　下503

。今朝、約束どおりに、内田夫人についておば様の遺骨が眠る宝泉寺へ行った。火葬——恐ろしい習慣——は葬式の翌日に行なわれた。今やあの親切な老婦人は[35]壷の中の数片の黒焦げの骨だけになってしまった。法要が九時に始まるので、八時十五分ごろ家を出て、ひどいぬかるみと雨と雪の中を、約三マイルほど人力車で行き、お寺に着いた。（中略）読経が始まったが、間に時々青銅の鐘の柔らかい音が入った。内田夫人は、体を私のほうにのりだして言った。「本当に無益な儀式です。お坊さんがお祈りしているのですよ」内田夫人は[36]目に涙をいっぱいためて、無表情に読経を続ける僧の顔を見ていた。私も、こんな無益な方法で神を求めている気の毒な人たちに対し、悲しみと哀れみを感じた。法要は長くはなく、すぐに僧たちは仏壇の蓮の形の器に香を焚き、私たちにお辞儀をして立ち去った。これは私たちにお焼香するようにという合図である。内田夫人は、私に[36]悲しげな目をむけてヤーちゃんとともに前に進み出た。

17・2・7条　下509

。骨董を集めている神山は、坊さんに、そっときいた。「あちらの脇侍の像にほれこみました。近頃は、あのような像が買えるかどうかご存じですか」「買えないと思いますよ」「どこに行ったら買えますか」と神山はしつこくたずねた。内田夫人は[36]笑いながら「神山さんはよくお寺に行くのですよ」と言う。

17・2・7条　下510

(37) 内村鑑三夫人（旧姓浅田タケ）——→(242) ハリス、メリーマンC（東京英和学校教師）

。アディと私は、先日、日本人の結婚式に行った。友人の内村（鑑三）氏が三月二十八日の夜の結婚式に招いてくださったのだ。（中略）横のドアが開くと、少しざわめきが起こり、一同が立ち上がった。そこへ内村氏は、仲人のご主人に腕をとられて現われた。あとにはご家族——父上、母上、妹さんと弟さんが続いた。次に花嫁が出て来た。立派に着飾ったご婦人が付き添っていたが、花嫁のおかげで貧弱に見えた。花嫁は、[37]感じのいい顔立ちの、見たところ二十三くらいの小太りの人であった。しかしあとで聞いたのだが、たった二十歳だそうである。紅白の縮緬（ちりめん）の美しい衣装をつけ、その上に、お姫様のものかと思われるような、美しく刺繍した打ちかけを着ていた。[37]髪はマルマゲに結ってあり、アゲボーシという四角のかぶりものを額の上につけていた。（中略）式が終わると、ハリ

ス氏はうしろにさがって、[242]満足気に手をすり合せて一同に向かい「内村様御夫妻」を紹介した。間違いかもしれないけれど、出席者のなかには、この言葉を聞いて花嫁が[37]クスクス笑ったように思った者がなん人かいた。次に客は一人一人出て行って、幸せなお二人にお祝いを言った。各自が違ったお祝いの仕方をしているのを見ていると、なかなか面白かった。ある者は進み出て、遠くのほうからかしこまってお辞儀をする。ある者は、外国式に握手をする。（中略）私が握手をすると、花嫁は私の手をぎゅうと握った。続いて行なわれた結婚披露宴では、花嫁はまわりに集まった友人たちがいくらすすめても、何も食べなかった。[37]かわいいおすましやさん！花嫁はうつむいて、うしろにいた友達の手に何やら字を書いていた。談笑したり食べたりしながら九時ごろまでいて、新婚のお二人にさよならを言って、帰って来た。

17・4・1条　下513 514

（38）ウッド（英国公使館守衛）――→（164）スペンサー、マチィルダA嬢（海岸女学校・東京英和女学校〈聖書・英語・音楽〉教師・宣教師）

。今日はとても気持ちの良い日だったので朝早く図書クラブに行った。あまり早かったので、アンダーソン夫人はまだ来ていず、ピーコックとウッドが面倒をみてくれた。それから築地へ行き、ミス・スペンサーを訪ねた。[164]さも物憂げに、言葉を引っ張ってダラダラとしゃべる変な癖のある人だが、[38]ウッドの訛りよりはましだ。

12・4・26条　下195

（39）ウメ令息

。今朝目覚めると、ウメの坊やが午前三時に亡くなったと聞かされた。その子は長い間病気だったが、悪くなる一方で、とうとう亡くなってしまった。ウメは最後の男の子の遺体のそばに一日中坐って、この上もない悲しみに暮れていた。（中略）その子は十三歳の利口な[39]かわいい子だったが、死ぬ前に、ウメに「お母さん、どうして僕はこんなに早く死ぬように生まれたの」と嘆いたそうだ。

9・6・29条　上208

（40）エドワード夫人

。北洋船ベガ号を見物に行く人たちもいた。ノルデンシェルド教授が希望者を招いたのだそうだ。ウィリイはこの偉大な北極探険家〈以前は不可能と考えられていた北洋水路を開いた〉と、月曜の夜の工部大学校における晩餐会で会った。もし男の人がいっしょだったら、この有名な船に行って見たかったが、女ばかりなので、日本人がよく言う、カイモノニイッテ来た。エドワードの店へ行って毛織物とカンバスをたくさん買った。エドワードの妻は、日本人の貴婦人をはじめて見て[40]びっくりしていた。

12・9・17条　下327

（41）榎本武揚（露国駐在公使）

。海軍将校三人、公使三人、牧師一人、一般人二人が私たちの面倒を見てくれ、一人がケーキを持ってくると、食べ終わりもしないうちにほかの人が「もっとずっといい物」を持ってきますからとお皿を片づけてくださる。誰かがアイスクリームを持ってきてくださると、別の人がそんなものよりこちらの方がずっといいですよとおっしゃる。榎本氏は他に何も持ってくるものがないとわかると、日本とアメリカの旗を持ってきてくださり、シャンペンを飲みましょうと言われた。私がお断わりすると、森夫人とご自分の奥様にすすめ、それも断わられると、わざわざと[41]がっかりしたような顔をして「仕方がない、一人で飲みましょう」とおっしゃった。

12・7・16条　下271

（42）エルドレッド、カロラインE令嬢（宣教師）→（23）ヴィーダー、ピーターV（開成学校・東京大学〈物理学・数学〉教師）令嬢ガシー

（43）大久保三郎（一翁令息）　（44）同夫人→（69）勝　安芳（海舟・安房守）長男小鹿　（71）同三女逸子（お逸）

（139）柴田（女子師範学校職員）　（181）竹村謹吾　（198）ディクソン、ウィリアムG（工部大学校〈英語・英文学〉教師）

（207）徳川家達（徳川宗家一六代）　（279）ホイットニー、ウィリアムC令嬢アデレイド〈アディ〉（クララ令妹）

◦やがて、さらに何人かが挨拶したあと、滝村氏が入って来られて、[181]英語がよくしゃべれるという紳士を紹介なさった。私たちのそばにいた一人の立派なサムライが私たちに向かって話し始めたが、その人は五年以上アメリカにいたことがあって、たった二年前、ニューアークの私たちのうちに来たことがあるそうだ。母の「どこで学ばれたのですか、この国ですか、それとも外国でですか」という質問に、すらすらとその人が答えたので、私がハンカチで笑いを隠すと、戸のそばにいた、[43]いたずらっぽいきれいな黒い目の、際立って端正な顔立ちをした若者が気づいてこちらを見ていた。サムライはすぐにウィリイと会話を始め、時々私たちにも話しかけた。なかなか剽軽（ひょうきん）な気質の人で、日本人の肌が黄色いのは日本のお茶の色のせいだと[181]快活に言った時、なんて面白い人なのだろうと思わずにはいられなかった。（中略）とても静かな明るく気持ちのよい日で、空気は故郷（ふるさと）の六月の空気のように爽やかだったから、私は思わず、なんとなくいつもそばを歩いていた連れ、つまり例の[43]目元の涼しい若者にそう言った。するとその人は力をこめて、まるでアメリカの春がどんなものかを見て知っているかのように肯定したので、私はこの人は外国にいたことがあるのかなと思い始めた。

10・2・17条　上324 325

◦屋内に入ることになったが、徳川公が近道をしようとして塀の上に飛び乗ると、大久保氏が[43]笑いながらかかとの辺をつかんで押さえたが、徳川将軍家のお世継ぎ様が脚をつかまえられて塀の上にまたがっているのは、[207]あまり威厳のある格好ではなかった。

10・2・17条　上328

◦大久保氏は新しい帽子をかぶっていた。黒いリボンのついた白い麦藁帽で、今年東京の若者の間に大流行している。[43]非常に若々しく見え、とても十八歳より上だとは思えないが、そっと教えてくださったところによると二十歳だそうだ。

10・7・21条　上389

◦次に大久保三郎氏が[43]びっくりしたような顔をしておいでになった。家を見つけるのに一苦労なさったのだ。そのあとに小鹿さんが

よそ行きの服装でやって来た。(69)○○○○○容姿の端整な小鹿さんと並ぶと、大久保氏は(43)○○○○○見劣りがするが、社交では大久保氏が一番だ。紳士的であるばかりでなく、まるで学生のように陽気である。

11・9・27条　下51

。柴田氏の楽器は「ひちりき」というもので、クラリネットに似ており、まるで工場か機関車の汽笛のような大きい音を出して滝村氏のやさしく悲しげな笛の音を完全に打ち消してしまった。大久保氏、お逸、アディと私の四人は隣の部屋にいたのだが、柴田氏の騒音が始まると大久保氏は耳に手をあてて「助けてくれ。鼓膜が破れる」と言ったので、私たちは(71)(279)○○○○○大笑いをした。次に日傘を持ってそれで演奏しているような真似をされた。(43)○○○○○○頬をふくらませ、目を大きく開いて。お逸と私はおかしくてたまらなかった。(中略)次にディクソン氏が『サウル』の中の「死の行進」〈アディと私がアディの歌える子供の歌を一つ歌ってから〉を弾かれ、みんなにほめられた。みんなといってもお逸は別で、彼女は、私の椅子の背に寄りかかって私の指輪をほめ、(43)○○○○○○色目を使っている大久保氏のほうにすっかり気を取られていた。

11・9・27条　下52

。ほかの楽器の演奏がすんでから、柴田氏が私に一本指で「主われを愛す」を弾くのを教えてほしいと言われた。それで私は彼の(139)○丸○○○○○○○○○ぽちゃの色黒の短い中指をつかまえてその曲を弾かせた。彼は大いに満足し、ほかの連中は大いに笑った。いや、はじめはしんとしていたが、ディクソン氏と大久保氏がいきなりからからと笑ったのでみんな真似して笑ったのだ。私はだんだん顔が赤くなってきまり悪くなりながら、笑わずにかろうじて曲の終わりまで弾いた。私の弟子の柴田氏は(139)○○○○○○○○○○○裁判官のように真面目な顔であった。まるでアブラハムかそういった家長に「ヤンキー・ドゥードル」を教えているような気がした。それから彼はまた甲高い音を出す笛を取り上げて、今覚えた曲をこれで吹いてみると言った。耳をつんざくような音が鳴りわたり、みんな耳が痛くなってしまった。オルガンの一番強い音でも完全に消されてしまう。ディクソン氏は部屋中歩きまわりながら(198)○○○○○ゲラゲラ笑った。

11・9・27条　下53 54

。お逸は田安公にお目にかかって来たところだったので、大久保三郎夫人が[44]○○○○○○、どんな着物を着ていたかをこと細かに説明した。　13・1・17条　下422

（45）大鳥圭介（工部頭・工部大学校校長）　（46）同令嬢ゆき　（47）同令嬢菊子（きく）——→（227）西田伝助所生子（赤子）　（279）ホイットニー、ウィリアムC令嬢アデレイド〈アディ〉（クララ令妹）

。今夜、精養軒の本店（采女町）で盛大な宴会をやっているが、炭鉱の調査に蝦夷（えぞ）へ行く大鳥氏の歓送会らしい。みんなの声の中から大鳥氏の[45]△△△笑い声が聞き分けられる。　9・6・20条　上204

。約束にしたがって今朝、大鳥家の末娘のお菊ちゃんを迎えに行った。猿町まではよかったがそれから先は道が悪くて、ほとんど通行不可能に近かった。お菊ちゃんは私が迎えに来るのを待っていて、よろこんで家に来た。みちみち、いろいろ話題を考えて話をするようにつとめたので、木挽町に着く頃にはすっかり仲よしになっていた。アディは玄関にとび出してきたが、[279]○○○○はにかんで黙っていた。お菊ちゃんはおとなしいよい子で、[47]○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○大きな美しいおだやかな黒い目をしていてほんとうに美人である。十一歳だが、九歳のアディよりも[47][279]○○○○背が低い。皇室の花である菊という名がぴったりの少女である。　11・2・14条　上486

。私はお菊ちゃんにベッドを整えたり、そのほか私の朝の仕事を手伝ってもらった。その間、私の大きいスリッパをはいて、ばたばた歩きまわりながら[47]△△△△△△△△△△△△△△△あどけないおしゃべりを続けた。私のスリッパが大好きになったのだ。　11・2・15条　上487

。大鳥閣下（工作局長）はまだ帰っていらっしゃらなかったが子供たちは皆家にいた。おゆきさんは大変危険な肝臓の病気でとても悪そうだ。[46]○○○○○○青白くやせてもう長いとは思えない。　12・5・29条　下229

（48）大原——→（80）カローザーズ（カロゾルス）、クリストファ（慶応義塾〈英語・文学〉教師・築地大学校創立者・宣教師）

（204）天皇陛下（明治天皇）

。午後に、インブリー夫人がみえたが、快活な方なので、おかげで私も気分が晴れやかになった。いろいろのことをお話しになったが、大原氏がいっしょに住んでいて、牧師になる勉強をしているそうだ。大原氏はカローザーズ氏の教会では、もう説教するのをやめている。どうしてかというと、大原氏が[48]△△△

。私たちはおけいこを始めた。大山夫人は毎朝九時に来られる。気だてのよい、やさしい方で、大臣の奥様方の間では[50]美人と考えら○○○○れている。　12・9・2条　下320

。大山（沢子）夫人がいつものように来られ、おしゃべりをした。十六歳で結婚して、今二十歳だそうだ。西郷（清子）夫人は二十六歳。大山夫人の教科書にはノアの箱舟のことが出ていたので、説明してあげたところ、とても面白がられた。頭がよくて理解しようと一生懸命である。ノアからダビデ、ソロモン、モーゼ、そのほかの旧約聖書からはじめ、福音書まで来て、「世の光」キリストの生涯について復習した。私の生徒さんはキリストについて一度も聞いたことがないそうだ。小一時間はかかったが、私の短い説明が終わると大山夫人は[50]△△△

。お逸さんが私を客間に呼び、吉原夫人と小鹿さんの奥様と、お逸さんからの美しい縮緬(ちりめん)をくださった。クリスマスの贈り物にするつもりであったが、私が元旦に皇后陛下に拝謁することになっているので、お正月前に仕立てさせるのに間に合うように、今日くださったのである。大山夫人は皇后陛下と談笑し、陛下は、夫人自身のことや、アメリカのことなどいろいろお聞きになり、大山夫人は、(53)△△△△△△△△△△△△△△△△普通の丁寧なことばでお答えしたそうである。

16・12・7条　下500

(54) 岡田夫人つる——→(35) 内田きの

(55) 岡田松生——→(93) クーパー(クーパル)、チャールズJ(東京大学〈哲学・歴史〉教師)　(162) 杉田(元良)勇次郎(津田　仙《学農社農学校開設者》弟子)　(182) 田中(勝家家扶)　(198) ディクソン、ウィリアムG(工部大学校〈英語・英文学〉教師)　(259) 藤島常興(測量器械製造家)

。マルコ伝を初め英語で、次に日本語で読み、ディクソン氏が説明し、岡田(松生(まつお))が通訳した。それから日本語の讃美歌を歌い自由討論になった。ターリング氏はこの機会をとらえて、「おさな子のごとくなる」ことについて長い話をした。それから誰かお祈りをする段になって、津田氏の弟子の杉田が立ちあがり、隣の人が何か言いたいことがあるという。どうぞということで、みんながしんと静まりかえった中を、かなりの年の藤島(常興、息常明は海舟門下で測量器械製造家)氏が(259)○○○○○○○真剣な面持ちで立ち上がり、威儀を正して一同にお辞儀をした。「今晩読みましたところは、大変すばらしいと思いますが、私は大変無智で、皆様が何の話をしておられるか知りたいと願っておりましたので、この機会にお尋ねしたいと思います。おそれいりますが、私の前に立って話を聞いてくださいませんか」とソファーで(55)○○○○○○目をまるくして坐っていた岡田に言った。岡田は(55)○○○○○びっくりして立ちあがり、誤解して聖書を渡そうとした。「いいえ、聖書じゃありません。こちらに来て机のそばに立ってください。いえ、そこじゃありません」と(55)○○○○驚いている青年をみずから位置につかせると、「そう、そこにいてください。知りたいことがありますので、どうぞ全身を耳にして聞いてください」と言うと、集まった人たちの方を向いて話し出した。(中略)ここで五、六人の人たちがこの奇妙なスピーチに答えようと腰を浮かせたが、藤島氏

はそれをおしとどめ、見得を切るように手をひろげ、(259)△△△△△△△△声を高めて言った。（中略）岡田はその間じっと動かず、(55)○○○○○○○おびえたような、かし○○○○○○○

。教会は日本にあるあらゆる宗派の代表の人たちや信者でいっぱいだった。私たちが入っていった時、[56]○○○

が司会をなさるべきだと思います」「それは駄目です」と大きな赤ちゃんをあやしていた和田夫人が叫んだ。[342]△△△「私は無知な田舎者でございますから」「それでは尾崎夫人が司会をなさるべきです。私たちはお宅に集まっているのですから」「皆様、お許し願いとうございます。ご存じのとおり、私はこんな集会に出たことがございません。どのように会をすすめていったらよいのかまったくわかりません」と、尾崎夫人は[57]青ざめておっしゃった。「では私たちがお教えいたします」と一人が言った。尾崎夫人は[57]不愉快な顔をなさり始めたので、一同は、ふたたび笠原夫人に向かった。笠原夫人は、ほんとうは、最初から司会することを期待していたにちがいないのだが、しぶしぶ司会を引き受け、何度も途中で、「このようでよろしいのでしょうか」「間違っておりませんでしょうか」とたずねた。

17・5・8条　下527 528

(58) オシリア（ゴーブル、ジョナサン令嬢）――→(16) ヴァーベック（フルベッキ）、ギドーH・F（開成学校教養学科教師・宣教師）

(59) 奥地利公使（シェッファー、イグナッツF）

。シーボルト男爵といっしょに来られたオーストリア公使は若い方で、騎士の鎧に兜をかぶり、腰には長い刀を下げておられたが、あっちこっち動きまわって命令を下す時に、この剣がガチャガチャと大きい音をたてて少々滑稽であった。[59]自分の凜々しい姿を見せびらかしたかったのだと思う。

10・11・30条　上433

(60) 小野（報知新聞論説委員）――→(157) 杉田玄端（玄白猶子・元外国奉行支配翻訳御用頭取）令息盛　(174) 滝村鶴雄

(213) 富田鉄之助（第二代日銀総裁）夫人縫　(218) 中原国三郎（銀行家）　(277) ホイットニー、ウィリアムC夫人アンナ、L（クララ令母）　(314) 森　有祐

。先週のある晩、みんなで〈みんなとは、母、富田夫人、有祐、盛、小野氏と私である〉銀座に出かけた。私たちは日本の提灯（ちょうちん）を持っ

て、買い物をしながら笑ったりしゃべったりして楽しく過ごした。花やおもちゃをたくさん買って十時に帰宅した。(277)(213)(314)(157)(60)○○○○

8・10・11条　上65

。小野氏は本当にいい方で紳士だが、とても剽軽(ひょうきん)でもある。(60)△△△

を時々お引きになるだけで、誰の助けも借りずに二時間ばかり話をされた。　8・11・26条　上86

。小野氏は朝鮮遠征には反対している。なぜかと言えば、日本はひどい負債を負っていて、小野氏の言うところによると、朝鮮との戦争は必然的な破滅を早めるだけでなく、日出ずる国はたちまち砕け落ち、そして地球上に散り散りになってしまうだろう。国外に目を向ければ、外国は男女とも、天賦の才のある人や知識ある人材に恵まれている。（中略）それから女性が――ここで小野氏は目から[60]○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○らあふれ出て、その男らしい頬を伝わろうとした涙を拭いた。ああなんということか！女の人たちには精神がない、本が読めない、子供たちを教えることができない。母親は子供の最初の教育者であるのに、その母親が無知で学問を軽蔑し、顔に化粧して口紅を塗ることにしか関心がないのだったら、子供はどうやって正しい考えをその若い心に植えつけられるだろうか。（中略）小野氏は、自分の心配事で私を「退屈させて」すまなかったと謝られたが、私は「興味深いお話でした」と言った。辞書で示さなくてはならなかったので、「interesting」という語をお見せすると、小野氏は訳の日本語を読んで悲[60]○○○○しげな顔をなさって、すぐに英語の語義のついた日本語の相当語を探された。見るとそれは「楽しい」「健康によい」などだった。明らかに間違っていたから、私が「sympathy（共感）」という語を探し出すと、それが適切な語だった。　8・11・26条　上87 88

。今朝、朝食の支度をしに下に下りたら、小野氏がいつもの威[60]○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○厳あるサムライの着物とは違う格好で、何かお手伝いをしようと現われた。　8・12・11条　上91

。帰宅すると私を呼んで、二人で月光のもとで富士山を見た。本当に美しい眺めだった。月の光の輝く空にきらめく星が、夜の王冠の宝石のように富士山の頂上を取り囲み、雪に覆われた富士山は「大日本」の大山脈の王者にふさわしく、白く堂々とそびえていた。私は我が友小野氏と玄関先を歩いたが、小野氏は月を見上げながら怪[60]△△△△△△△△△△しげな英語で言った。“I lofe（=love）it. I lofe it!”と。　8・12・11条　上93

。私たちは夕方の残りを羽根つきで楽しく遊んだ。私は小野氏と、それからほかの人たちともやった。中原氏はこのかなりむずかし

い遊びの達人で、ダンスをしている時と同様、とても優美に冷静に、少しもあわてたり興奮したりせずにする。その様子は見ていてとても楽しい。しかし小野氏は、あっちへ行ったりこっちへ行ったりして、[60]○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○どんな謹厳な人でも噴き出したくなるような格好で打つ。中原氏が落ち着いて優雅にすいすいと打っているのに、小野氏はまるで命がけで戦っているかのように、あらゆる方向に絶望的に打ちまくるのだった。派手に膝をつき、羽子板を劇的に振りまわした。それから突然前へ突っ込むと、そのゆるやかな服はうしろへはね、興奮のため[60]○○○○○○○○○○○○○○○○○○○眼は輝き、黒い髪はもじゃもじゃになった。何事につけ小野氏の行動を見ると、「なんでもやる時は全力を尽くしてやれ」というのが信条かと思われるほどだ。一度床にぺたりと倒れたので、私は、報知新聞の編集主幹は、その有能な記者がこんな格好をしているのを見たらなんと言うかしら！と言った。彼は横たわったまま少し考えて、それから飛び起き、[60]○○○○○髪をとかして服を直し、まじめくさって羽根つきをやめた。それから中原氏は小さなバンジョー、つまりサミセン（三味線）を取り上げて、小野氏と盛と私に、歌姫のしなつくりを真似てみせた。[218]○○○○○それは真に迫っていたが、とても滑稽だった。中原氏はお祈りがすんでから帰って行ったが、もう十二時だった。

8・12・25条　上105 106

（61）小野寺常治

。学校の理事の小野寺氏はとても親切で、何かと援助しようとしてくださる。[61]△△△△△△△△△英語もすばらしく、とてもいい方だ。

9・4・15条　上161

（62）オーランド・ベントン——→（240）バラ、ジェームスH（バラ学校開設者）夫人マーガレット令息

。雨は土砂降りになるし、私は悲しくて、バラ夫人の家に辿りつき、夫人の温かい胸に抱かれるまで、みちみち大粒の涙をぽろぽろ流した。（中略）夫人はアルバムを取り出して写真を見せてくださった。息子さんは十六歳だが、最近送ってきた写真は、とてもよく撮れていて[62]○○○○○○○○印象深い顔だった。その若い顔には男らしさとやさしさが同居していて、私はすっかり魅せられてしまった。（中略）夫人は[240]○○○○○○○○○○○○○母親として当然の誇りに満ちており、私がその写真に惹かれているのに気づいて、「気に入りました？この子を永久に差しあげて

もいいのよ」と言われた。私はお礼をのべてから、ご本人よりも写真をくださいと言ったが、お母様は写真を手離すことはできなかった。彼の名前はオーランド・ベントンというのである。自分では「オーリー」と言っている。オーランドって、なんてすてきなロマンチックな名前。[62]○○○○○○○○○すばらしい顔の青年にぴったりの名前だ。　11・6・22条　上581 582

(63) 笠原（富田家使用人）

。朝から一日掛りで庭師が玄関、居間、食堂、表のベランダなどに飾りつけをしてくれて、クリスマスの準備が整った。富田夫人が、笠原を手伝いによこしてくださったが、[63]○○○背が高いので、いろいろ役に立った。　10・12・24条　上443

。昨日の午後、お逸と私が月琴（この頃月琴が大流行）を弾いているところへタケが入って来て、笠原という紳士が外に来ていると告げた。私たちはもちろん彼の出現に驚いた。とりわけ彼の服装に驚いた。それはかかしでも恐れをなすようなものだった。ウィリイの一番古い洋服——[63]○○○○○○○○○黒っぽいシャツ、○○○○○○○○○編んだネクタイ、○○○○○○○○○前が破れたズボンに穴のあいた靴下を履いていた。○○○○○○○○○一年間散髪したことがない○○○○○○○○○

△[65]△△△

。勝夫人と、おこまつと、お逸が出迎えてくださったので、私はお辞儀をして挨拶をし、おみやげを出して中に入った。客間へ行く間、おこまつとお逸は私のまわりで踊り浮かれ、お母様はうしろから(68)○○○○おごそかについていらっしゃった。

9・11・3条　上266

。支度ができあがったところへ小鹿さんとお逸が一台の人力車に乗って来た。二人ともとても立派な服装で(69)(71)○○○背が高く、咲き誇るばらの花と形のよい杉の木のようだった。(71)○○○○(69)○○○美しい娘とハンサムで教養の高い息子を見送る勝夫人の(68)○○○○眼が誇らしげであったとしても許されるであろう。

11・2・23条　上495

。角を曲がった所で紺の着物をお召しになり、手には金粉をつけた漆塗りの文箱を持った勝氏ご自身にばったり出会ったのである。私はこんな所で勝氏に会ってきまりが悪く、はっとして、深く頭を下げ、「失礼いたしました」と小声で言って、道をあけた。勝氏はちょっと足を止め、(67)○○○○○にっこりして、「すっかり日本人におなりですな」と言って通り過ぎて行かれた。

12・1・11条　下128

。今晩は田中が新左衛門の勘定のことでは仲に入りたくないというので、私が日本語で説諭してみることにした。新左衛門は月ぎめでなく、一時間六セントで雇ったので、付けが九、十ドルにものぼってしまったのだ。もちろん、これまでのことは仕方がないが、二度とこんなことが起こらないようにしなければいけない。田中が役に立たないので、母は、勝夫人に聞いてみたらという。夫人は来客中で、お逸に海軍の軍服とか金の肩章や帽子のリボンのかかった小鹿さんの部屋につれていかれたが、お逸の羽織、着物、帯、かんざしが、若き海軍士官の部屋をわがもの顔に占領していた。間もなく夫人が入ってこられたのでまた「苦労話」をくり返すと、(68)○○○○眉をよせてじっと聞いておられたが、じきに(68)△△△△△△△△△△あの感じのよい話し方で、そもそもが間違いだったのだから、今となっては致し方がない、とおっしゃった。(中略)新左衛門には私が話しましょうと言ってくださった。

12・4・2条　下165

。富田夫人はおしゃれで、勝夫人に言わせると(213)○○○○○若作りなのだが、先日夫人が富田夫人を訪れた時、かんざしが落ちそうにみえたので「お縫さん、見事なかんざしが落ちそうでございますよ」と言ったところ、富田夫人はすまして「いいえ違うんでございますよ。まる

で落ちそうに無造作にさして、粋に見せるのが今の流行りなのです」と言った。勝夫人は、こんなことはみんなばかばかしいことで昔ながらのやり方が一番よいと言われる。出発の話にふれたら、夫人もお逸も私の涙顔に同情して泣いた。夫人は船まで私たちといっしょに来てくださると言われた。

13・1・2条　下403

。今私たちはウォデル氏の大邸宅の一部で、まずまずの暮らしをし、たいそう楽しくしている。日本の友人たちは、私たちを大歓迎してくれるのでなんだか故郷に帰って来たような気がする。勝家では、私たちがもとの家に戻ることを望んでおり、今その家に洋間を増築中だ。勝夫人は相変わらず快活で、二人の「おばあさん」とともに、こおろぎのように生き生きとしておられる。

15・11・25条　下436

。昨日の午後、エマ・ヴァーベックを訪れて帰ると、突然勝夫人から迎えがあった。使者の言伝でおたてさんが亡くなったと思い、急いで行き、目を真っ赤にした勝手働きの女中に迎えられて、小鹿さんの前に案内された。小鹿さんは火鉢のそばに坐り、やはり泣いておられた。もう一方の部屋に行くように言われ、そこへ勝夫人が私を迎えに出て来られた。やさしい老いた顔に悲しみをみなぎらせておられたので、私はお手を取り、わっと泣き出した。しばらくの間私といっしょに泣かれてから、「まだ息があるのですよ」とささやかれた。そして私を病室に導かれた。そこには家の者が皆集まり、はげしく泣いたり、すすり泣きしながらこの臨終の婦人を見守っていた。病人はフトンの上に横たわり、空気枕から頭を半分落として、せわしく不規則な呼吸をし、時々ゆるんだ痰が咽頭でガラガラ音をたてていた。彼女の忠実な看護婦はそばに坐り、時折唇をぬらしてあげていた。大名の桜井（忠興）氏とその奥方、令嬢と令息は心配そうに円形を作り、青ざめた顔の表情の変化を一つも洩らさじとじっと見守っていた。父君桜井氏は輪郭のはっきりした顔立ちで、大きな黒い目をして若々しく見えたが、坐ってキセルをくゆらし、心配を見せまいとしておられた。しかしおなつさんのやさしい目は涙でいっぱいであった。桜井家の主席家老はお床の頭の方に坐り、おたてさんの脈をとっていた。医者の経験があったのだ。

17・7・17条　下535 536

。内田夫人はお床の上に坐って妹の頭を支えておられた。そのほかの人は、オシショウさん、岡田夫人、疋田夫人、と七郎で、半開きの戸口からは時々通りかかる人の頭が見えていた。七太郎であったり、神山であったり、長次、梅太郎、時には勝氏ご自身であったりした。勝氏は落ち着きを失った亡霊のように、心配を抑え切れず、うろうろしておられた。(67)○○○

。小鹿さんは今日は少し良くなったが、今朝おたてさんが、かつて美しい花嫁[70]として入った入口を箱に入って出られた時、最後の別れをするために、数人の女中たちに支えられ、お床からよろめき出た時の顔色[69]はまさに死に神そのもののようだった。そんなに青く、弱々しく、やつれ果てて。

17・7・18条　下538

。奥に若奥様のおたてさんがいらっしゃらないのは、本当とは思えない。ああ、あそこへ行ってあの方のおだやかなお顔[70]や、やさしい微笑を見たり、大きなやわらかい真剣な目をのぞきこんだりできないなんて、どうして考えられよう。またおたてさんは私の言うことをとてもよくわかってくださった。私が不完全な日本語を話しても、あの家の誰よりもよく、その意味を理解してくださった。

17・7・18条　下540

(71) 勝　安芳（海舟・安房守）三女逸子（お逸）——→(35) 内田きの　(36) 勝　安芳（海舟・安房守）長女内田夫人夢（ゆめ）　(43) 大久保三郎（一翁令息）　(70) 勝　安芳（海舟・安房守）長男小鹿夫人栄子（えい・たて）　(247) 同次女疋田正善夫人孝子　(248) 疋田正善長女輝子　(287) 松平確堂（元美作津山藩主）夫人　(288) 同養女八百子（やお）　(295) マレイ（モルレイ）、ディヴィット（文部省学監・教育博物館設立者）　(296) 同夫人　(335) リーランド、ジョージA（体操伝習所・東京師範学校・東京女子師範学校〈体育理論・体育実践〉教師）夫人　(344) 渡辺ふで（福岡県令渡辺　清令嬢）

。勝夫人は、二人の「子猫」を連れて来られた。勝逸（海舟の三女、クララと同年齢）嬢はとてもきれいで[71]、美しい着物を着ていた。

9・5・10条　上174

。勝家のお逸が五時に来て九時までいたが、とても楽しかった。私と同じ年で、英語を習っている。二人で散歩に出て、蟹を取りに海軍操練場の構内に行った。家に帰ってから縁側に出て月を見たが、お逸は私に腕を回して、「あなた好きよ」と言った。[71]美人で活発な人である。

9・7・5条　上216

。勝家のお逸が今日十二時に来た。すばらしい着物を着て、(ア)○口紅をこってりと塗り、顔にお化粧をしていた。昼食のあと二人でアイスクリームを作ったが、お逸は大きなエプロンを掛けて手伝った。(ア)○かわいい優しい少女で、私は同国人の友達のように大好きだ。お逸が英語をしゃべれるか、私が日本語をしゃべれるかしたらいいのにとつくづく思う。でも二人は(ア)△片言同士でなんとかうまくやっているのだ。(ア)○丸顔で日本人にしては大きないたずらっぽい黒い目をした美少女で、十六歳だが日本では若い淑女なので、結婚の申し込みがたくさんある。でも結婚などしてはいけない！〈もしできたら〉アメリカへ連れて帰りたい。近いうちに泊まりに来ることになっているが、本当に大好きだ！

9・8・24条　上231

。お逸は十二時前には寝ない習慣なので、私たちは十時まで起きていた。(ア)○結い上げたばかりの髪が、外国の枕のためにくしゃくしゃになったら気の毒だと思い、誰かに日本の枕を買いにやらせようかと言ったが、お逸は強く反対して、髪をこわさないようにうつぶせになって眠るからと言った。おかしな子！うつぶせになって、どうやって息をするつもりなの！結局、寝る時になって、セイキチが「イチバン枕を出してきたので、我が友はそれで寝た。（中略）翌日、ケーキを作った。お逸は家に持って帰るカップケーキを作ったが、滑稽で見ていられないほどだった。指にバターがちょっとつくと、(ア)○顔をしかめて、あわてて拭き取りながら「(ア)△カーッ」と言うのだった。日本人は、我々の使うバターがとてもきらいだ。

9・10・21条　上255 256

。お逸は、両端に花の刺繍のあるすてきな赤い絹のスカーフのようなもので着物を縛り上げ、腰のちょうど下のところで結んで、これは長崎風だと言った。青い絹の紐が帯を支え、赤い絹の紐がうしろの結び目を押さえている。靴下ははいたままで、私はすっかり立派な貴婦人になっていた。それからお逸が反対に私の服を着込むと、家族全員が大変面白がった。自分の姿が見えるように、みんなが長い鏡を持って来てくれた。勝夫人は、お嬢さんに「(ア)○顔が黒いから、洋服が台なしだ」とおっしゃった。

9・11・3条　上268

。横浜は活気にあふれ、人々で賑わっていた。まず二、三個所をまわってから、軽食をしにホテルへ行った。みんな私たち、とりわけお逸をじろじろ見た。お逸は(71)○○○○○とてもきれいなうえに美しい着物を着ていて、横浜乙女とは違っていたからである。

9・11・22条　上275

。二時に、富田夫人が手伝いに来てくださり、三時までにはすっかり準備が整った。勝家のお嬢さんが、とてもすてきな贈り物をたくさん持って最初に来たが、晴着を着て(71)○○○○○唇を赤く塗り、顔に○○○○○○○○○○○○○○○○○お化粧をしてきれいだった。お逸はお逸なりに(71)○○○美しい。

9・12・25条　上292

。今朝、富田夫人がおいでになって、一日うちで過ごされた。お逸と私は授業を終えて階段を下りながら、食堂にいらっしゃることを知らずに、奥様のことを(71)△△△△△△△△△△△△△大声でしゃべっていた。無論悪いことは何も言わなかったが、青色とピンクのことを話していて、お逸が「青ってきらいだわ、だっておばあさんの色ですもの」と言った。私が、「日本のおばあさんていくつなの」と言うと「そうね、富田さんの奥様の年ぐらいね」「では富田さんはおばあさんなの？」と私が言い、「そうよ」と逸が答えた途端、奥様の肩掛けと頭巾が玄関の椅子の上にあるのが目に入った。私たちは聞かれたに違いないと思って廊下に駆け戻り、そこにあった大きな箱の陰に隠れ、(71)○赤○○○○○○○○○○○○○○○くなって笑いが止まらなかった。しばらくしてから勇気を出して食堂へ行った。

10・3・14条　上333

。蟹を取っている間に、おやおさんはその黄色(288)○○○○○○○○○○○○○みをおびたかわいらしい顔に泥をはねかけてしまい、困って私に泥を拭いてくれと、(288)○○○○○○○○○○○○○卵形の顔を向けた様子はなんともいじらしかった。私は顔をきれいに拭いてあげ、差し出した手も洗ってあげたが、おやおさんは私と年もあまり変わらないし、背丈も同じくらいなのだ。お逸は一目見ただけで(71)○○○○○○とてもきれいだと思うが、おやおさんは愛(288)○○○○らしく、だんだん美しさが増して(287)○○○○○○○○○○○○○○○○○

際に竜を見た人のことを真顔[71]○○で話すので、私は衝撃を受けた。（中略）神様の話を聞き、神様にお祈りを捧げ、キリスト教徒と交際している人が、そんなことを信じているなどと考えるとぞっとする。しかし、考え直してみると、そんなにひどいことでもなさそうだ。お逸の真顔[71]○○を見ていると、そのように思えてくる。

10・7・31条　上395 396

。富田氏と、勝家の方々と、滝村家の方々が、次に来られた。皆よそ行きの着物でとてもきれいだ。疋田（海舟の娘、孝子の嫁ぎ先）氏の長女のお輝ちゃんは髪[248]○○○○○○○○○○○○○○○○から何から大名のお姫様のような姿であった。大久保氏はお客様の相手をしてくださったが、なんとなくお逸に一番関心がおありのようだった。お逸はきれいだ[71]○○○し、いい人だからそれも不思議はないが。

10・12・24条　上446

。ヒューイットの店に寄って砂糖を買い、隣の薬屋に行きかけた時に、入口のところでお逸は急に胸が痛み出して、人力車に戻らなければならなかった。私もいっしょに乗り、彼女は私の肩に頭をのせ、私にしがみついた。私は片手で私たちの膝の上の植木鉢をしっかりと押さえていた。お逸はとても苦しそうで、見ていられなかった。顔は真っ青になって[71]○○○○○○○○○○○○○○○○

全部ひきとって彼女の代わりに返事をしたのだが。マレイ先生もご在宅で、(295)いつもと変わらず愛想がよく、ハンサムであった。マッカーティ夫妻やユウメイも同席していた。お逸はきれいな着物を着てとてもかわいく見え、みんなからちやほやされた。

12・1・20条　下134

。四時頃、予定より遅く、私たちの二台の人力車は夏の延遼館（浜御殿）の入口に着いた。玄関に待っていた制服の召使があまり大勢なので、お逸は恥ずかしがってしまい、真新しい立派なかんざしも、代々伝わる家宝の鼈甲飾りも彼女に勇気を起こさせる威力はなかった。また上品な五十ドルもした帯のことを考えても一向に落ち着くことができなかった。しかし私は、前に何度も御殿に行ったことがあるではないか、それにこの御殿は、わが国の前元首のお住まいではないか。アメリカ娘の私をおいて、ここに来る権利がほかの誰にあろうか。そこで二人分の勇気――お逸はすっかり勇気をなくし、頬の赤味もない――を出して、車から降り、名刺を出し、グラント夫人に面会を申し込んだ。

12・8・29条　下317

。お逸は私の洋服を着て、写真を撮りに出かけた。洋服がとてもよく似合う。私がお逸の着物を着るよりもずっとよく似合うだろう。老婦たちが出て来てほめ、色が白くて、ほっそりして、背が高くて、何ときれいなイジンさんでしょうとささやき合っていた。

12・9・15条　下326

。お逸ともお別れをしたが、涙にむせてほとんど物も言えないので彼女を抱くようにして、「さようなら、最愛の友よ、神の祝福がありますように」とだけ言った。お逸も目にいっぱい涙をうかべて私にキスをし「ああクララさん、これが最後なのかしら」というと、こたつに顔をうずめてしまった。私は悲しさのあまりお逸をそのままにして飛び出してしまった。

13・1・24条　下431

。逸さんは結婚してからいろいろ気を遣わなければならないことがあるので、いかにも奥様らしく、しとやかになったが、昔と同じ愉快な娘である。先日赤ちゃんのりよ（長女）をつれて訪ねて来た。

15・11・25条　下436

。私は、母が生前好んで訪れた青山に、安息の場所をさがしに出かけた。（中略）母がそこに埋葬される最初の外国人であり、日本人の間に埋葬されるのは母にとっても英雄的であると彼らは言った。そしてこれは母の願いでもあった。お逸さんが来た。[71]はげしく泣いて、物言わぬ遺体の上に身を投げかけ、冷たい手をさすり、やさしい言葉をつぶやいた。亡き母のことでお逸に生きた説教をすべきだと考えて、私は長い間、お逸と話をした。（中略）小鹿さんの奥様は、[70]泣きながら、物言わぬ姿に頭を下げ、「ああ先生！もう一度お目にかかりとうございました」と、おっしゃった。内田夫人は、[36]さめざめと泣き、深々と頭を下げられた。しかし、母がとても愛し、非常に関心をもっていたその妹さんは、何も言わなかった。頭を下げて部屋の中に入り、はなれたところに立ち[247]ヒステリックに泣き、腕で私をかかえて言った。「私はあなたのママを姉と思って慕っていました」　16・4・30条　下468

（72）勝　安芳（海舟・安房守）三男梅太郎――→（147）ショー、アレグザンダーC（芝聖アンデレ教会創立者・軽井沢避暑地発見者・宣教師）夫人メリーアン　（251）疋田正善三男静守

。一番幼い七郎はまったくの腕白小僧で、ありとあらゆるいたずらをした。今まで会った日本人の男の子の中には、こんなにふざけた騒々しい子はいない。[72]りんごのように丸いばら色の顔をした梅太郎も非常に愉快な少年で、いたずらにかけては七郎よりひどかった。外ではあんなに礼儀正しく控え目なこの子供たちが、家ではちょうど私たちのようにふざけているのを見て驚いた。　9・11・3条　上268

。生徒は、お逸、おこまつ、梅太郎（三男、後クララと結婚）、七郎（四男、義徴）、滝村氏の弟の小松で、とても面白い授業ができた。日本語を正確に話すことができさえすればいいのにと思う。梅太郎と七郎はいっしょに坐っていたが、梅太郎が聡明なのに七郎は明らかに愚鈍だ。七郎が読むと、梅太郎がはたから注意し、かわいそうな七郎の腕をつついて、[72]言葉をはっきりと発音してあげるのだった。　9・10・22条　上260

。義兄の疋田（正善）氏が私たちの写真を撮りたいと言い、お逸と二人で一つの椅子に坐って撮ってもらったが、障子のすき間から

梅太郎の黒い目がいたずらっぽくのぞいているので、なかなかまじめな顔をしていられなかった。　10・4・12条　上347

。間もなく梅太郎が、つるつるに磨いた顔に、五つの紋を染め抜いた灰色と黒の着物を何枚か着て、その上に茶色の袴をきりっとつけ、真新しい下駄を履き、手袋をはめて父上の家から出て来たが、すっかり一人前の紳士のようであった。紋付きの袖にとおした腕を組み、十六歳の青年にできる最上の威厳のある足取りで、いつも寝起きしている姉上のおゆめさんの家に行き、うやうやしく案内を乞うた。　12・1・1条　下119

。少し遅れていたので、小さな日曜学校に私たちはドヤドヤと入るようになった。最初に私、次に一番背が高く、肩幅が広くてすてきな梅太郎、きりっとした小さなサムライ、法衣をまとい、頭を青々と剃りあげたお坊さん、それから私の本を持って竹次郎がつつましやかに入った。(147) ショー夫人がほほえみながら近寄ってきて「今日はまた大家族を引き連れていらっしゃいましたね」と言われた。　12・11・30条　下367

。しかし、もっともうれしいのは梅太郎の変わりようである。祝福あれ、若者。彼は十九歳の大柄な若人に成長し、物腰も控え目で落ち着いているが、何よりすばらしいのは、すっかり心が変わったことである。まったく信心深いクリスチャンになったのである。それはいろいろな振る舞いに表われている。たとえばある夜、お茶の後、梅太郎は敬虔な態度でテーブルのそばに頭をたれて感謝のお祈りをしたので、こちらが非難されたような気がした。　15・11・25条　下437

。各自が一本ずつくじをひいた。くじには短いことばと番号が書いてあり、その番号と贈り物の番号が合うようになっていた。すぐに贈り物が運びこまれ、とても面白かった。（中略）玄亀はマッチ箱を、疋田夫人は天狗の面を、そしてセイちゃんは紙白粉を当てた。「お前には大いに必要だよ、顔が黒いからね」とやさしい叔父様がいった。歩けないおばあさんはぞうりを、ヨーロッパ人のように髪を刈っている梅太郎は、日本人が髪を結うのに使う紐を一束。だからこれは無用の長物だ。　16・1・9条　下440

。勝氏は梅太郎を軍人か金細工師にするつもりらしいが、本人はキリストの教えを説教したいと言っている。梅太郎は[72]○○外見はおとな
でも、精神的にはまだ子供で、家を離れることはよくないと私たちは皆心配している。　16・1・9条　下441

(73) 勝　安芳（海舟・安房守）令母のぶ

。お逸が洋服を着ているのを見に、一人の老婦人が入っていらっしゃった。その方はお祖母様で、今初めて知ったのだが、この大き
なだだっ広い家のどこかにお祖母様が隠れていらっしゃったのだ。大変お年寄りで[73]○○がりがりに痩せておられたが、小鳥のように敏捷
○○○

（76）金沢良斎夫人　（77）同令嬢録（矢田部良吉〈植物学者〉夫人）

。門のところで、ちょうど帰ってゆかれる金沢先生とばったり出会ったのだったが、勝氏のおうちにいる間に聞いたところによると、二月の末に矢田部氏が金沢お録さんと結婚なさるのだということだった。お録さんは母のところへ勉強に来たがっていたのだ。彼女が二十四歳と聞いてびっくりした。[77]○○○○○○○○とても小柄なので、十八ぐらいかと思っていたのに。もう十年以上も英語の勉強をしておられる。とにかくお目出たいことだ。　11・1・31条　上472

。今夜はいつにない大きな集会をもち、勝家から九人も来た。（中略）金沢先生の奥様で、現矢田部夫人お録さんの母上の金沢夫人も出席された。この老夫人は話をしていると不愉快になる。私が言っていることにかまわないで、私の言葉ばかりほめている。私――「アナタガ、オチカイカラ、ドーゾ、タビタビ、イラシテクダサイ」〈近くにおすまいですから、時々おいでください〉。夫人いわく、「マア！ドーモ、ハナハダ、ヨクワカリマスカネー、サトーサン！マア！ジツニヨク　ワカリマスネ！」まったく不愉快だ。それで私は、長いことお坐りになってさぞお疲れでしょう、お録さんはどうしておいでですかとたずねた。答える代わりに、彼女はそばに坐っていた佐藤夫人に[76]△△△小声で、「キレーダネェ！」といった。私はうんざりして、気のいい佐藤夫人のほめ言葉を耳にしながら席を離れた。　12・8・10条　下287

（78）カネ（ホイットニー家使用人）　（79）同夫人セキ

。私たちは新しい料理人が来ると思ってきのうカネに暇を出したのだったが、結局新しい料理人は来なくて、また、カネを呼び戻した。[78]○○○○○○○○○○○○○○○○爪が長くて汚いし、髪がぼさぼさしているが、それでも誰もいないよりはましだ。　11・1・9条　上456

。[79]○○○○○口の大きい陽気なカネのおかみさんが手伝いに来てくれた。子供が四人もあって、しかも一人の息子は水腫にかかっているのに。　11・2・21条　上493

（80）カローザーズ（カロゾルス）、クリストファ（慶応義塾〈英語・文学〉教師・築地大学校創設者）　（81）同夫人ジュリ

イア（A六番女学校開設者）――→（48）大原

。鶏肉のスープを召し上がったが、料理人がキャベツを入れたので、鶏肉の味がすっかり奪われてしまっていたそうだ。鶏肉はとても小さくて鳩みたいだった。カローザーズ夫人はそれを手に取って笑い[81]、ほとんど叫ばんばかりに、「この鶏は鳴いたことは一度もなかったでしょうね」と言われた。　9・7・25条　上225

（82）川路利良（東京警視庁大警視）夫人――→（307）村田一郎夫人久子（ひさ）

。川路夫人は、初めのうち粗末な日本語しか私につかわれなかったが、そのうちにだんだん上等な日本語になって、おしまいには、この上ない洗練された日本語をおつかいになった。彼女は私たちのまわりにつきまとっていた例の丸顔の青年に、私の日本語はほんとうによい日本語で、普通の外国人――特に横浜の外国人――の使うのとぜんぜんちがうと話しておられた。　11・3・12条　上506

。村田夫人もきれいだったが、川路夫人の美しかったこと、あの年齢の方としては、ほんとうにびっくりする美しさだ。村田夫人はずっと私のそばについておられて、一度ほんとうにキスされた。日本人は絶対にキスなんかしないのだが、誰に教わったのだろう。彼女は私に遊びに来て欲しいと言われ、写真をくださると約束された。村田氏は大変なご機嫌で、くつろいだご様子だった。　11・3・29条　上520 521

（83）河村（笙演奏家）――→（14）岩田通徳（日本音楽学校主）

（84）川村順次郎（幕臣・成瀬隆蔵令厳）　（85）同夫人――→（223）成瀬隆蔵（講習所第一回卒業生）

。人力車で、九段の競馬場に面した感じのよい茶屋に行ったが、そこには大勢の人が集まっており、花火を打ち上げるための櫓（やぐら）が組み立てられ、提灯がつるしてあった。私たちを招待なさった成瀬（隆蔵、講習所第一回卒業生）氏が迎えてくださった。成瀬氏はこ

の近くに住んでおられて、ここはお友達の家である。ご両親もごいっしょだったが、令息ほど顔立ちはきれいではなかった。(223)(84)(85)○○○

性である。勝家では小鹿さんは真面目過ぎるし、梅太郎は若過ぎるので、七太郎さんというサムライが選ばれた。彼は背の高い屈強(138)○○○○○○な男性で、蹴ったり、ひっ掻いたり、噛みついたりして勇ましく抵抗し、(86)頑丈なおきくを突き倒し、おせきをひっ掻き、おえいに噛みついて、自分も歯を(138)一本折るというすさまじい奮戦振りだった。それでも女たちはめげず彼をつかまえては投げつけたので、しまいには悲鳴をあげて降参した。

11・12・23条　下113

。おきくもそばにきて坐り、口笛で犬を呼ぼうとしたが、(86)上唇が短いのでうまくいかなかった。

12・4・5条　下168

。今日、お菊が結婚するとお逸が言うのでびっくりした。「結婚ですって、いつですか」と私は叫んだ。「今日です」お菊は勝家にずっといるものとばかり思っていたので、私はひどく驚いた。食事のあと、花の刺繍をした美しい縮緬の着物に、白い紋織の半衿をしてお菊が別れを告げにきた。驚くほど美しい帯を締めて、(86)白粉を濃く掃いていた。悲しさに胸がいっぱいという風に(86)泣いていたが、無理もない。長い間育くんでくれた家を出て、見ず知らずの人たちといっしょに住むのだ。

12・11・28条　下363

(87)ギューリック、ジョン（生物学者・宣教師）令嬢ファニー ——→ (100)クレッカー、フレデリック（宣教医）夫人

(324)ヤングマン、ケイトM（築地B六番女学校設立者・宣教師）　(334)リート、レナ〈リーナ〉嬢（ヘップバン夫人姪・新栄学校教師・宣教師）

。薬屋のイギリス人の店員が母に、「ムッカジュマ」にもう行ったかと聞くので、母はびっくりしてそんな場所は知らないと言ったが、やがて向島のことだと気がついた。これはミス・ギューリックの(87)「アーリンガト・ゴザリーマス」と同じぐらいひどい。

12・4・5条　下169

。母は早く教会を出、私に、残ってミス・ヤングマンをお茶にお連れするようにと言った。いわれたとおりに待ったが、そうしなければよかったと思った。みんな私が見当もつかない人と婚約したと思っているらしく、ミス・リートは「クララさんあなたのことを

聞きましたよ。姓と国籍をお変えになるそうね」という。私は驚いて「えっ」というと、ミス・ギューリックも「私もよ」と相槌を打ち、スコットランド帽子を手に取って私の目の前で意味ありげにくるくるまわした。クレッカー夫人も近寄ってきて私に手をかけ、「すっかり聞いてしまいましたよ。でも心配することはありません。誰にも言っていませんから」そして、私の頭を肩のところに引き寄せやさしくキスして「私たちはみなとてもおめでたいことだと思っていますのよ。ほんとにお似合いですものね」と言った。私はこんなことを言われてほとんど半狂乱だったが、ミス・ヤングマンがくすくす笑いながら言ったことは一番ひどかった。「ヒヒヒ、オ(324)△△△

16・1・22条　下443

（90）九鬼老大名（隆周ヵ）

。九鬼夫人とお嬢様の衣装をととのえるのに大変忙しかった。今日はごいっしょに横浜への最後の旅をした。九鬼夫人は熱海にいらっしゃるが、お嬢様――本当は九鬼氏の殿様の娘――は、帽子を合わせに行かなければならなかった。お嬢様は今朝七時にここへみえて、洋服に着替えて、駅へ行った。そこでお父様の老大名と家来に迎えられた。兄がいっしょに行ってくれて、楽しい一行になった。殿様は[90]○○○

がお役人のことばであり、上流人のことばなのだ。（中略）やがて雑談のあと、小さい贈り物を差しあげておいとまをした。知事は同じような[91]○○○○○○○丁重な身のこなしで、人力車のところまで送ってくださった。どうして二人で一台の人力車に乗るのかとお聞きになったので、途中でお話をしたいからだと答えると、[91]○○○○○○○○○からからとお笑いになった。

11・7・15条　上597 598

。私は何気なくお逸と私の誕生日のことや、私たちの年齢をしゃべってしまった。「いや、そんなお年なのですか。もっとお若いのだと思っていましたよ」と言われた。私は「ええ、どんどん年をとってしまいます。もうじきおばあさんになります」と申し上げると知事は[91]○○○○○○○○○からからとお笑いになって、それはまだまだ先のことだとおっしゃった。（中略）楠本知事のお国は、薩摩の近くの長崎であってご自分の日本語はよくないとしきりにおっしゃったが、もちろん私がほめることを期待されてのことだった。[91]△△△△△△△△△難しい漢語をたくさん入れた役人のことばを使われるが、私はかろうじて話し相手がつとまった。

11・9・2条　下40 41

。紳士方が並んでおられる間を、私たちは階段を下り、客間に行った。部屋の前にはたくさんの日本の友人たちが集まっていた。[91]○○○○○○○堂々とした姿の楠本（正隆）氏がこちらに近づいて来られ、閣下からご親切なご挨拶のことばをいただいた。

12・8・28条　下310

。お別れの挨拶をするために朝早く家を出発、全部まわった。森氏の家では老夫人に別れを告げ、楠本家（永田町）に行く。楠本氏は在宅で、母堂に丁重に紹介された。[92]○○○○○○○○美しい老婦人である。楠本議官は府知事を辞められ、暇ができたので、ヨーロッパやアメリカにそのうち行きたいとおっしゃったりして、とても楽しい時を過ごした。

13・1・23条　下429

（93）クーパー（クーパル）、チャールズJ（東京大学〈哲学・歴史〉教師）

。クーパー氏は、私のところへきて、例の[93]△△△△△△△△△△△△△大げさでセンチメンタルな言い方で「ああ、あなたもディクソンさんもいない東京なんて考えられません」などと言ったが、全部は書けない。

13・1・9条　下412

。私はショー夫妻にとても惹かれるので、ユニオン教会よりセント・アンドリュース（聖公会の教会）のほうが好きだ。それで最後

の安息日はアンドリュースで過ごした。ショー氏はロマ書の「悪をもて悪に報ゆる勿れ」をとって説教をなさった。クーパー氏は私を見て[93]○○○○○とても喜び、外までいっしょに来てくださった。

13・1・18条　下426

(94) グラント、ユリシーズS（元美国大統領・北軍総司令官）　(95) 同夫人ジュリア　(96) 同令息フレッド（陸軍大佐）

→(285) マッカーティ、ディビィB（開成学校〈英語・ラテン語・博物学〉教師・宣教師）夫人ジョアンナ・M

。最初にグラント将軍夫妻が現われ、ヘイル・コロンビアの吹奏裡[94]に[95]○○○○○○○○○○しっかりした足どりでホールに入場され、最上段の席につかれた。（中略）それから一人ひとり歩みよって将軍に謁見した。シモンズ博士が母を、森氏が私を紹介された。愛する祖国の前大統領とのはじめての会見に、私は名状しがたい気持ちに襲われた。暖かく私と握手され、「初めまして、ミス・ホイットニー」と親切に挨拶されたが、光輝ある星条旗の下で、その[94]○○○○○○○○○○やさしい青い眼と正直そうに日焼けした顔を仰いだとき、私は感動の極に達し、祖国への誇りと、アメリカ人であるという歓びをかみしめた。祖国の恥辱となるような振る舞いをすることが決してありませんように。グラント将軍は、写真から想像するように、[94]○○○○○○○○○○がっしりした体つきだが、背はそれほど高くなく、顎ひげの正直そうな顔は、日にさらされた○○○○○○○○○○のと旅のおかげで焼けており、やさしげな青い眼と、親しみのもてる物腰だった。夫人のほうは、[95]○○○○○○○○○○ずんぐりした体形でいささかがっかりしたが、[96]○○○○○○○○○○笑うと愛嬌があり、物のわかった親切な方のようだ。グラント夫人はヘイズ夫人より気取っていると、ビンガム夫人が言っておられた。

12・7・5条　下247 248

。グラント将軍はとても赤い[94]○○○○○○○○○○顔をしていたが、グラント夫人は上野の時よりずっとよく見えた。

12・7・8条　下258

。グラント夫人は[95]○○○○○○○○○○かなり老けてみえ、おまけにとても不器量で、表情がいやだし、斜視だ。もっともこれは強い光にあたりすぎたせいだと母に言っておられた。（中略）自分の持ち物について、特に「私の主人が、私の将軍が」と、[95]△△△△△△△△△△ぺちゃくちゃしゃべるのを聞いているのはおかしかった。夫人は全体に人の善い方のようだが、見る人を威圧するといったところはない。どんな身分から成り上がっ

たかは明らかで、レディらしい点がほとんどなく、(95)○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○どちらかというと下品で、威厳がまったくないと私は思った。（中略）十六日には劇場にいらっしゃいますでしょうね、と私が言うと、夫人はあやふやに私を見て「はあ。あなたはいらっしゃるの？」とぶ(95)△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△っきらぼうに言われた。母が行くつもりのようですと答えると、グラント夫人は誇(95)○○○○○らしげに、「主人のために特に一番の俳優を集めたんでございますよ」と言われた。（中略）こんなに容易に元大統領夫人とお話できたことに私は驚いた。だが考えてみればそれほどむずかしいことではないのだ。真のレディは誰とでも対等で、どんな高い身分の人の前でもまごつくことがないのだから。だがグラント将軍夫人が、(95)○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○外見もマナーももう少し洗練されていたらと思わずにはいられない。

12・7・14条　下265 266 267

。あとで母がグラント夫人のところへ連れて行ってくれた。「前にお目にかかったことがありますね」と夫人は言われた。「はい」と母は答えた。「あなたは私をお訪ねくださいましたね」「はい。先月お訪ね致しました」「はて、あなたのお顔を知っていると思いましたのに」と利口なグラント夫人はことばを続けられた。（中略）それからマッカーティ夫人のほうを向いて、(95)△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△きつい口調で、「妃殿下はどこ」と言われた。「あちらの将軍のお隣で」と、マッカーティ夫人はてきぱきと答えた。(285)△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△話は違うが、マッカーティ夫人はやさしくて陽気ですばらしい方だ。

12・8・28条　下312

。ちょうどその時グラント夫人は青い洋服を着た女の人をちらっと見て、(95)△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△同じ怒った調子で、マッカーティ夫人のほうを向き尋ねた。「あの女の人は誰？」「ああ、あの方はブッケマ夫人でございます」とマッカーティ夫人は明るく答えた。（中略）グラント夫人は、ワッソン夫人と部屋を歩きまわり、骨董品をながめておられたが、突然骨董品の卓の上のほうにかけてあった版画を見あげて、(95)△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△うれしそうな声で叫んだ。「まあ、私の夫がいる！」確かにグラント将軍は壁から見おろし、一方ご本人は、同じような姿勢で、すぐ下に、何も気づかずにたたずんでおられる。（中略）グラント夫人も、森夫人に帰りのご挨拶をしようとしておられたが、階段に一方の足をかけて、立ち止まり、忘れっぽい将軍を(95)△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△大声で呼んだ。「ユリシーズ、あなた、私をおいていらっしゃらないで！」

12・8・28条　下314 315

。部屋の中をのぞくと、グラント将軍が、卓の前に坐って、岩倉（具視、右大臣）、三条（実美、太政大臣）、などの貴族たちと熱心に話し込んでおられるのが見えた。会談のじゃまをしたくないので、私は年上の紳士のあとについて行った。この方はヤング博士といって、『グラント将軍と世界一周』の著者で、相当に文名高い人である。若いほうは子息のフレッド・グラント陸軍大佐で、将軍と[96][94]○○○○○よく似ていた。

12・8・29条　下318

。フレッド大佐は玄関まで案内してくださり、石段の上で話をした。私は火曜日に出帆されるのかときいた。「いいえ」と彼は答えた。「三日までは発ちません。シチー・オブ・トーキョウ号の出帆が延期になりましたので」「日本から行っておしまいになって残念でございます」と私は言った。「私たちもとても残念です」と、フレッド大佐。「誰でも日本に愛着を感じるようになるのだと思います」と私は言った。「まったく、私の場合もそうです」男らしい大佐は[96]○○○○○○○○憂鬱そうに見えた。

12・8・29条　下319

（97）グリーン、ダニエルC（新約聖書翻訳委員・同志社大学教授・宣教師）——→（8）アレグザンダー、トーマス・サロン（明治学院〈神学〉教師）

。乗客の中には二等切符を持った騒がしいドイツ人やイギリス人がいて困ったなと思っていると、なんとうれしいことに、グリーン氏の[97]○○○○○○おだやかな顔を見かけた。ほかの人をやりすごし、「ああグリーンさん、これこそ天の助けですわ」と呼びかけ、事情を説明すると、騎士のようにバッグや傘を持ってくださった。おかげで、それまでは注意をひいてはまずいと思っていた外国人たちでさえ、平気で見ることができた。

12・4・19条　下190

（98）グリグズビー、ウィリアムE（開成学校・東京大学〈法律〉教師）

。ソクラテスについての講演は短く、簡明ですばらしかったが、グリグズビー氏の[98]△△△△△△△△△△発音が舌足らずなのは惜しかった。アテネの人たちは酒を飲んだ時だけ踊ったが、ソクラテスは健康のために毎日一人で部屋の中を踊っていたそうだ。とにかく面白くてためになる

お話で、こういう博識の講演を聞けてよかったと思う。

11・5・28条　上548

(99) グレーシー（クララ姻戚）——→(25) ウィニフレッド（クララ姻戚）

(100) クレッカー、フレデリック（宣教医）夫人——→(87) ギューリック、ジョン（生物学者・宣教師）令嬢ファニー

(101) 黒田清隆（参議兼開拓長官・陸軍中将）——→(30) 上野景範（英国駐在特命全権公使・外務大輔）

(102) 黒田長溥（元福岡藩主・参議・侯爵）

。約束どおり午後二時に松平氏がみえ、筑前の殿様である叔父の黒田（長溥）氏の家（赤坂福吉町）へ連れていってくださった。黒田氏の広大な屋敷は勝氏の大門からヤマト屋敷の近くの谷町（麻布谷町）までである。大きな白い門を通って、鉄の門のところで車を降り、中に入って行くと、(102)○○○○○○○○○○○○○○○白い長い髭をはやした上品な老人が迎えに出てこられた。孫息子（長成）と二言三言話すと、丁寧にお辞儀をし、中に招じ入れた。私たちが招待されたことに対しお礼を言うと、こんな汚い家に来ていただいてうれしいと答えられた。

12・5・8条　下210

(103) けい——→(202) てる　(260) ふゆ

。昼食後私はショー先生の日曜学校に行った。夫人が私に担当させてくださったのは、六人の面白い女の子のクラスだった。私が一番気に入ったおてるちゃんは十二歳で、杉田家の近くに住んでいる。(202)○○○○○○○○○○○頭髪がまったくないので奇妙な感じである。おふゆちゃんは大(260)○○○○○○○○○○○○○○○

にも会えないとお言い」と言っているのが聞こえた。呼ばれたから来たのにと癪にさわったが「図書クラブの会合に来ました」と言うと「だったら入るように言って」と(104)△△△△△△△△△△△△△と無作法にどなった。アメリカ人ということだけで、私たちに対して淑女にふさわしからぬ振る舞いをするのだ。ビンガム夫人もこぼしておられた。

12・11・27条　下362

(105) 小泉（松平確堂〈元美作津山藩主〉家来）――→(288) 松平確堂（元美作津山藩主）養女八百子（やお）

。祈禱会で、小泉氏が「ヒポクリット（偽善者）」を「ピポクリット」と(105)△△△△△△△△△△△△△発音したので、母が訂正したが、小泉氏はその甘ったるい発音を変えようとしなかった。こんなことを、「我が日記」のような重大な〈？〉ノートに書くのはあまりにもくだらないことかも知れないが、その時はおかしくてたまらなかったのだ。

9・12・16条　上288

。おやおさんがおすみと家来の小泉氏を伴って日曜学校に来られたが、彼は相変わらずの黄色いはだを(105)○○○○○○○○○して生意気で憎らしい男であった。おやおさんは背も伸び、(288)○○○○○○○○○

。お逸も、両陛下がお通りになる時には、愛国心の強い女性らしく、深々と頭を下げた。皇后様と侍女たちは絹かサテンの赤、白、紫、緑などの美しい衣装を召され、髪は長くうしろに垂らして、白い紙で結んであった。背の高い外国の使臣や日本人の役人の間では皇后様や侍女は子供のように小さく見えた。　10・11・30条　上434

。午後にシェパード氏がみえて、いろいろ話してくださった中に、宮中で舞台裏の天子様と皇后様をおみかけしたこと、皇后様が髪を結わせながら女官といっしょに笑っておられ、天子様は鏡の前に進まれて、いたってご満足気にご自分の姿に見入っておられたということを話された。　11・1・9条　上457

。次に皇后様が、美しい錦の長着を召して来られた。外側はたくさんの豪華な模様のついた濃い美しい水色の緞子で、赤い緋袴と真白な内着を召され、お靴をはいて、豪華な刺繍と深い縁飾りがある美しいフランス式パラソルをお持ちになっておられた。皇后様はお小さかった。とても小さく、きゃしゃで、高貴な貴族的顔立ちと、豊かな下唇をお持ちであった。儀式の時の慣例に従って厚化粧をされ、御髪は独特の平たい宮廷様式で、油を十分つけ、束ねて長くうしろに下げておられた。皇后陛下も握手され、公使たちの慇懃な挨拶に応えて、愛想のよいお言葉を返された。　17・4・25条　下524

(107) 幸野楳嶺（日本画師匠）　(108) 同夫人——→(278) ホイットニー、ウィリアムC令息ウィリイ（クララ令兄）

。幸野先生は、自称、骨董収集家である。私たちは二階に案内されたが、小さな窓から屋根にはい出て、そこから梯子を上って、下を流れる川の上につき出ている鳩小屋のような部屋へ行った。屋根の上には風呂桶があり、幸野先生は、毎日、湾から引いた水で水浴をする。雨の日には傘をさして！と言った。二階の部屋は僅か二畳半であったが、ここも骨董でいっぱいであった。特に古い物が置いてあった。（中略）片隅に戸棚があって画家の作品がいっぱいつまっていたが、火事の場合にすぐ運び出せるように、すっかり包装されていた。老師の言によれば、それが彼の最大の宝物なのだ。狭い庭にはもう一つのさらに小さい家があって、幸野先生はそこに一人で住み、奥様と使用人は大きいほうの家に住んでいる。（中略）もう一つの部屋も珍品がいっぱいあり、母屋よりさらに一層珍

しいさまざまな窓があった。たとえばお寺の鐘の形の窓や、難破船の舷窓など。兄はこの小さな家に頭をつっ込んだが、よほど苦労しなくては入れなかっただろうと思われる。兄は叫んだ。(278)△△△「いや全く、こんなすばらしい家は見たことがない」「おわかりでございましょう。主人は古女房のほかは何でも古い物が好きでございまして」と奥様は笑いながら(108)○○○○○おっしゃった。幸野先生はほんとに変人だ。そして今までに(107)○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○お会いした中で一番端正な老紳士である。親切で忍耐強い先生であり、私はすっかりこの方が好きになってしまった。

17・11・12条　下551

(109) 小菊（芸者）

。もう一人の子は明らかにグループの厄介者で、(109)○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○細いキラキラした目はいたずらそうで、絶えず笑っている。富田夫人のおつゆを持ってくる時、お盆の上にすっかりこぼしてしまい、別のを急いで持ってこようとしてひっくり返って、武さんと雄さんのうしろの障子がたおれてきた。二、三人の女の子がそれをとめようとして走り寄ったのだが、この小菊は一番最後なのに一番先に行こうとして火鉢につまずいて、きれいなお財布を火の中に落としてしまった。

13・1・7条　下407

(110) コクラン（カックラン）、ジョージL（旧約聖書翻訳委員・東洋英和学校設立者・宣教師）　(111) 同夫人　(112) 同令嬢スージー——→(16) ヴァーベック（フルベッキ）、ギドーH・F（開成学校教養学科教師・宣教師）

(113) ゴードン＝カミングズ嬢

。道で見かけた最初の骨董屋で、私がヤスを止める前に、「ああ、待って！」と彼女は叫んだ。(113)△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△それがあまりにも大きい声だったので、ヤスと店の人のみならず、そのあたりの人みんなの注目を集めた。しかし気に入ったものがなかったので、先へ進むとまた勇まし(113)△△△い叫び声でみんな足を止めさせられた。（中略）一方ミス・ゴードン＝カミングズ——いや、ゴーゴン（頭髪が蛇で、見る人を石に変(113)○○○○えたといわれる怪物の三人姉妹の一人）といったほうが良いのだが——は一軒一軒渡り歩いた。帽子をまぶかにかぶり、背が高いの(113)△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

△△△

(116) コラス嬢——→(230) パイパー、ジョン（日本聖公会祈禱書翻訳委員）夫人メアリー

。すばらしく美しい茶色のコートと、これによく合う帽子をかぶったミス・マクニールが、イタリア人の子供の歌手によって、信仰のない人が改宗するという話を読んだ。次にパイパー夫人が、お得意の「聖教徒の上陸」と題する、フェリシア・ヒーマンズ作の歌を歌った。とてもきれいな歌ではあったが、パイパー夫人の声は音量は良いがしわがれ声で気に入らない。(中略) それにしてもこんなに大勢歌の上手な人が集まっている中で、なぜ私なんかをわざわざ選び出したのか私にはまったくわからない。私に特別の好意を示されたかったというのだろうか。礼拝の讃美歌をリードするミス・エルドレッドやトルー夫人や、ミス・ヤングマンにミス・ギューリック、それにかなり力強く歌う、パイパー夫人やミス・コラスなどもいたのだ。(230)(116)△△△

殴るぞ」とか、「サミー、その琴をいじったらひどい目に合うぞ」とか、「坐れ、生意気な」とか、「おや、パパのかわいいかわいい赤ちゃん」とか、「眠ってしまえ！」といったような父親らしいせりふを次から次へと大声で披露した。(297)△△△△△△すばらしいお料理で、みんな上機嫌になった。(中略)マンディ氏は野卑なことばを言った。——いかにも彼らしいことだ。とにかく笑いながらの楽しい食事だった。(中略)ウィリイは外に出て行き、コーリー氏は(117)○○○○大きな目を据えて黙りこくっていた。マンディ夫人は眠った赤ちゃんといっしょに黙って坐っていた。それでディクソン氏と私は自由に話をすることができた。(中略)私はめったにおしゃべりはしない。特に男性を相手にしては。しかし今夜は薄暗がりだったので勇気が出て、まるでお兄さんに話しているように気楽に話せた。それでコーリー氏はあんなに(117)○○○○○○○○○○目を見張っていたのかもしれないし、マンディ氏は何も言えなかったのかもしれない。(中略)一つ書くのを忘れていたが、マンディ夫人の悲鳴のことである。堀切で最初にボートに乗った時に、ボートがちょっと傾いたので、彼女は(298)△△△△△大声を上げた。△△△△△△

（289）松平定敬〈定次郎〉（元伊勢桑名藩主）　（344）渡辺ふで（福岡県令渡辺　清令嬢・小鹿島夫人）

。今朝、新しい生徒が来た。例の高貴な家柄の大名令嬢と、少し身分の低いお友達である。それにいかめしいサムライがついて来た。二人に対する私の二度目の印象は、最初の時よりよかった。令嬢は前に英語を習ったことがおありになるのは確かなのだが、ご自分では頑強に否定なさる。(288)△△△

略）やがて祭礼は終わり、僧侶が順々に退場した。私たちも退場してよいと言われて、もとの部屋に戻った。そこで茶菓の接待を受け、若殿と確堂氏に紹介された。（中略）おやおさんとおすみがねずみ色の着物に白い半襟という服装で出て来られた。髪型はいつも[288][120]○○○

訳してくださった。　9・2・21条　上135

。母は今日気分がよくないので心配だ。パイパー氏が祈禱会にみえて、とてもすばらしい集会ができた。主題は創世記第一章、天地創造だった。佐々木氏はとても興味をお持ちで、質問し続けた。そのあとも残ってお茶を飲んで行かれたが、ご病気で目まいがすると言われ、(124)○○○○○○○顔色が悪かった。佐々木氏は、日本の習慣では、漢文を習う女の人はほとんどいない、読み書きを習うのは男だけだ！ということを私に話した。　9・5・1条　上171

。もう一つ面白いことがある。とうとう私は日本語の先生につくことになったのだ！軍人でもある佐々木氏が、交換授業を提案なさったのである。佐々木氏は申し分のない紳士で、(124)△△△△△△△△△△△上手に英語を話される。陸軍省の役人であるサムライで、本当に好ましい方だ。　9・11・21条　上274

(125) サットン、フレデリックW（海軍兵学校教官・機関教授局管理者）　(126) 同令嬢ネリー　(127) 同令嬢パーティ

(128) 同令息フレディ——→ヴィーダー、ピーターV（開成学校・東京大学〈物理学・数学〉教師）令嬢ガシー

。サットン家の娘さんたちが、アディと私を午後のパーティに招待してくれていたので、重い心を抱いて私は出かけた。小さい子供のパーティで、ガシーとハワードが来るまでは、アメリカ人はアディと私だけだった。いろんな子供っぽいゲームが行なわれて、私はまったく気乗りがしなかったが、つとめて機嫌よくした。しかしサットン氏が鬼の時だけは、(125)○○○○○○○太っているのにとても動きが早いので、私もす早く動きまわらなければならなかった。彼は(125)△△△△△△△しょっちゅう、△△△△△△△冗談をとばして私たちを笑わせた。サットン夫人も子供のようにはしゃいでゲームに参加した。（中略）ガシーとド・ボワンヴィル夫人と私で小さい丸テーブルを占領していたが、サットン氏がそこに来て(125)△△△△△△△△△△△冗談を言って笑わせるので、ほとんど何も食べられなかった。　11・3・20条　上515 516

。ド・ボワンヴィル夫人が芝のサットン氏のお宅へ連れていってくださった。三人のお嬢さんに会うためである。一番上の人は十六歳のネリーで、(126)○○○○○とても小柄で気持ちのよい人だ。　11・1・28条　上468

。今日はアディと私はサットン家のテニスへの招待を受けた。（中略）メイもいっしょでとても楽しかった。ジェニーとガシーも来ていた。ミス・ワシントンや何人かの子供たちもいた。私はメイと組んでサットン家のバーティとフロラを相手に一ゲームしたが、緊張して失敗ばかりした。それでも私たちのほうが結局勝った。サットン家の人たちは妙な人たちで、観察していると面白い。話し方がとても変わっていて、何を言っているのかよくわからない。ゲームの最中にバーティは私に何か命令するのだが、発音があまり変わっているので何を言われているのかわからない。フレディは私のことを、「クレラ」と呼び、妹のアディのことを、「エディ」と呼ぶ。みんな「ア」の音を発音するのに口を大きく開ける。フレディはミス・ピットマンをミス・ピットと呼び、ガシーのことを「大女」と呼ぶ。ガシーはかんかんに怒る。背のことは彼女が一番気にしている点なのだ。

11・9・12条　下45

(129) 佐藤令息

。今朝授業をしていると、あざらしの毛皮の帽子をかぶった風采のよい日本の紳士が入口の段を上がって来た。長窓をあけて、なんの用ですかと尋ねたら、サイキョウ（西京）から来ましたと言われた。私は西京の人は誰も知らないので、ウィリイのところへ飛んで行くと、ウィリイが下りて来たが、その人は勝氏の家にいるご病人佐藤氏の令息だとわかった。それで中に入っていただいて、午前中ずっと午後も半分ぐらいおもてなしをした。この佐藤氏の令息は、京都と大阪で勉強をしていたので、ミス・グールディやミス・ギューリックに会っている。十七歳だが年の割りにはとても大きい。音楽が猛烈に好きで、深みのある音楽的な美しい声で歌を歌う。私たちは午前中から午後にかけて歌を歌って過ごした。いっしょに歌っていただける方が見つかってとてもうれしかった。佐藤さんのお気に入りの歌はP・P・ブリスの「ホールド・ザ・フォート」で、完全な調子でとても熱心に日本語と英語で歌う。

10・3・16条　上334 335

(130) ジェシー（フェントン、ジョンW《海軍軍楽隊指導者・初代「君が代」作曲者》令嬢）——→(16) ヴァーベック（フルベッキ）、ギドーH・F（開成学校教養学科教師・宣教師）　(21) ヴァン・ビューレン、トーマスB（神奈川総領事・将軍）

(237) バチェルダー、令息ジョージ

(131) ジェニングズ船長

。ある時ジェニングズ船長がじゃがいもの皮をとりながら、「ご婦人がじゃがいも畑を歩きたがらないのはなぜか？」と言った時のい(131)○○○○○○○○○○たずらそうな顔を思い出す。私が降参すると、めがね越しにわざと真面目な顔をして「じゃがいもには『め』があるから」という。ひどい！

12・10・4条　下333

(132) シェパード、エリーT（外務・司法両省万国公法顧問）令嬢グレタ（グレッティ）　(133) 同令嬢アニー　(134) 同令嬢ルイーズ（ルウ）——→(136) しげの　(248) 疋田正善長女輝子　(336) ベイリー、チャールスW（海軍兵学校教官）令嬢リリー

。シェパード家のグレタとアニーは、母にとって大変な重荷である。特にグレタはぶきっちょで、無知で、しばしば生意気である。年は十二だが、(132)○○○○○○○○○○年の割におませで、態度が横柄だ。いつも話すことといったら、アメリカに帰った時に、お父さんが買ってくれることになっているもののことばかりだ。（中略）(132)△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△まるで、すでに決定したことのようにしゃべる。

11・11・22条　下91

。きのうは十六日に発つベイリー夫人をお別れに訪ね、リリーを今日の午後に招待した。シェパード姉妹にも手紙を出しておいたら、二時に来た。(132)△△△大声のグレッティーは自慢屋で騒々しく、(132)△△△アニーは青白くて気が抜けたようだし、(133)○○○○○○○○○○ルイーズは生意気で、一番上の姉さんの自信たっぷりな態度とうるささを真似しようとしていた。(134)(132)○○○○○○○○○○△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△リリーはきれいな服を着てあとから来た。リリーはイギリス人でほかの人はアメリカ人だが、リリーの静かな美しいマナーが対照的で、いいなと思わずにはいられなかった。(336)○○○○お輝としげのがお茶に来て、(248)(136)△△△△△△△△△△おしゃまな話し方が面白かった。私がテーブルの用意をしていると、しげのがそばに来て、「クララさん、まん中の女の子は黄色い目をしているわ」とささやいた。(136)△△△△そして、お輝もしげのも、可愛らしく手を合わせて、あの黄色い目の女の子の隣にしないでと頼んだ。

12・5・10条　下213

(135) ジェームズ、ジョンM（船長）夫人

。きのう、芝にジェームズ船長の奥様をお訪ねしてとても楽しかった。応接間もとてもすばらしかったが、一番すてきなのは奥様ご自身で、(135)○○○○○○○○○○○○○○爪の先までほんとうの淑女だ。　12・10・3条　下331

(136) しげの——→(133) シェパード、エリーT（外務・司法両省万国公法顧問）令嬢アニー

(137) シズ（ホイットニー家使用人）

。シズという名の二十歳のきれいなかわいい女の使用人を雇ったが、一年十ドルで、英語を教える条件になっている。(137)○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○　8・8・19条　上34

(138) 七太郎（勝家家扶）——→(86) 菊〈きく〉（勝家使用人）

(139) 柴田（女子師範学校職員）　(140) 同令息キク——→(43) 大久保三郎（一翁令息）

。お昼に父からことづけがあって、皇后様の学校の柴田氏という方が、息子さんを連れて夕食にみえるということであった。それで、私たちはご馳走を作った。五時頃に、(139)○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○長い灰色のひげのある長身の、威厳のある老人がみえた。衣装は長くゆったりしていて、(139)○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○として、家長の風格のある方であった。彼が入って来られた時に、母は(139)○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○アブラハムのことを連想したほどで、聖書の中から出て来たような感じであり、古代のユダヤ人を思わせた。息子さんのキクさんはまるっきりちがった感じで、(140)○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○背が低く色白の丸顔で小さい下がり目をしており、少女のようにはにかみ勝ちに首をかしげていた。私たちは英語しか話せないふりをしていたが、彼の通訳は間違っていたから彼は半分もわかっていなかったと思う。ご老人は私が日本語がわかることを発見されて、専ら私を相手に話をされた。息子さんは大いに不服で、父上が私の日本語をほめると、部屋を出て行ってしまった。しかしそのうちに機嫌を直して、夕食後にはもっといるように父上に頼んでいたが、(139)○○○○○「アブラハム」は自分たちの天幕に戻らなければならないと言った。　11・9・4条　下43

。次に柴田氏が殿様のようにいかめしい顔をして、子供のしつけ方について重々しい声でいろいろと良いアドバイスを与えたが、女生徒たちは柴田氏に子供が生まれるにちがいないと思ったらしく、おかしがっていた。　12・5・1条　下204

(139)○○○○○○　(139)△△△△△

(141) 柴田（一等伶人、芝葛鎮ヵ）――→(14) 岩田通徳（日本音楽学校主）

。柴田氏はきれいなテノールで、磨く値打ちがある。彼はオルガンの横に立って歌の先導をしたり、いっしょに笛を吹いたりした。あとで音楽について彼といろいろ楽しく話し合った。　12・1・25条　下138

(141)△△△△△△△△

。ミカドの音楽家であり、戦舞を大変美しく舞った柴田氏が、きのう音楽のことで相談に来られた。宮廷ブラスバンドは、グラント将軍のレセプションで演奏する適当な曲を集めるよう命じられたのだが、知っているのはスコットランドかフランスの曲ばかりなので困っているという。そこで、「ヘイル・コロンビア」「星条旗よ永遠なれ」などを弾いてさしあげ、ディクソン氏から「勇者がやってくる」の楽譜をもらってあげると約束した。柴田氏はこの上もなく喜んで帰っていかれた。　12・7・2条　下246

(141)○○○○○○○○

(142) 清水嬢

。ビンガム公使はグラント将軍（アメリカ前大統領）を出迎えて東京にお連れしに行かれた。神戸に寄る予定だったのだが、コレラのため東京に直行することになさったのだ（七月三日、米艦リッチモンド号で金剛艦に出迎えられ横浜入港）。通訳は、ひどく気取って滑稽なミス・清水ではなく、グラント夫人の小間使がなることになっている。　12・6・24条　下243

(142)○○○○○○○○○○

(143) シモンズ、ドゥアーネB（宣教師・在横浜開業医）

。客間と居間には大勢の人が集まっていた。おしゃべりしている人、ダンスをしている人。ウィリイはヘップバン先生の家に戻って行き、玄関のベルを勢いよく鳴らして、シモンズ先生に、病人が出て先生を呼びに来たと言った。ところが困ったことに先生は平然として、「待たしておきなさい」と言われた。やっとのことでウィリイといっしょにうちに帰って来ることを承諾された。ウィリイは

横の入口のほうに先生を案内した。ドアの内側には大勢の女の人が待ち伏せしていて、キャーキャー言いながら先生にとびついた。そして先生のオーバーや帽子を脱がせ、(143)○○○○○○顔が青ざめてあっけにとられている先生を、皆々と明かりがついている玄関のほうへ引っ張って行った。

10・12・15条　上442

。一番にみえたのはシモンズ先生だったが、なんとなく(143)○○○○○○主賓気取りで、勝氏や富田氏と話しておられた。

11・1・9条　上457

(144)シュウ（ホイットニー家使用人）　(145)同夫人タケ——→(244)ハル（ホイットニー家使用人、金太郎夫人）　(279)ホイットニー、ウィリアムC令嬢アデレイド〈アディ〉（クララ令妹）

。おタケは夫のことで困っている。シュウはとてもよい使用人なのだが、(144)○○○○○○○○○○○○○○隣の通りの美人の料理人を見る目が、おタケには気に入らないのだ。かわいそうに私のところへ来て、苦労を綿々と訴えた。シュウは若いし、(144)○○○○○いい男だからと辛抱はしているが、正統な妻である自分のほうは、(144)○○○○○○○○○こんなハンサムな夫に(145)○○○○○○○○○釣り合わないほどやつれて、○○○○○○○老けてしまったのも、シュウが悪いからだとこぼした。

12・5・27条　下226

。シュウとタケに暇を出さねばならなかった。そして別の料理人と、おかみさんのハルを雇った。ハルは、私が日記を書いているベランダに出て来てお辞儀をした。この女中は二十八歳で、(244)○○○○○○○○○○なかなかいい顔立ちをしていて、(145)○○○○○○○○○タケみたいにやせてはいない。タケは発作的に狂ったようになる。木曜の夜、二時頃、タケは二階に上がって来て、私の床でいっしょに寝たいとせがんだが、私が断わると、アディのベットの下にもぐり込み、それでアディが眼をさまし、手斧を持った人がベッドの下にいると叫んだ。(279)△△△タケは追い立てられて、玄関の押し入れにはいり込み、朝までそこにいた。

12・8・1条　下278

(146)ジュエット、フランクF（東京開成学校・東京大学〈化学〉教師）——→(198)ディクソン、ウィリアムG（工部大学校〈英語・英文学〉教師）　(325)ユーイング、ジェームスA（東京大学〈機械工学・物理学〉教師・実測地震学者）

。ユーイング氏は、ディクソン氏が音痴に歌ってもかまわないですよ、蓄音機のほうで直しますから、といった冗談をとばしておら(325)△△△

○○○

なヨシ。昨年のクリスマスには、(151)○○○○○○○なんとよく笑い楽しんでいたことか。ああ、私の兄弟よ。あなたは、私になんと愛想よくしてくれたことか。

17・9・27条　下545

(152) 杉田玄端（玄白猶子・元外国奉行支配翻訳御用頭取）　(153) 同夫人俊　(154) 同令息武　(155) 同令息(?) イノコ
(156) 同令息雄　(157) 同令息盛　(158) 同令息六蔵　(159) 玄端令息武夫人よし　(160) 同令嬢かしく　(161) 杉田玄端令母→(35) 内田きの　(36) 内田夫人（勝　安芳《海舟・安房守》長女夢〈ゆめ〉）　(54) 岡田夫人つる
(60) 小野（報知新聞論説委員）　(178) 滝村鶴雄令母　(213) 富田鉄之助（第二代日銀総裁）夫人縫　(238) 林　恒五郎
(288) 松平確堂（元美作津山藩主）養女八百子（やお）　(306) 村田一郎　(320) ヤス〈やす〉（杉田家使用人〈女性〉）

。土曜日はとても楽しかった。富田夫人と、芝に住む夫人のおば様を訪問したのだ。三時に行って、六時か七時までいた。杉田（玄端）先生〈富田夫人のおじ様〉の家は日本風の造りで、芝の美しい高台にあり、前とうしろに見える江戸湾と東京の眺めがすばらしい。着くと茶の間へ通され、家族の方々に挨拶し、アルバムを見せていただいて、お菓子をご馳走になった。そこに坐っていると足音がして、「いらっしゃい」という快活な声がした。(154)△△△△△△△振り向くと、この家の長男（武）だった。（中略）ここで英語が話せるのはこの青年だけなので、とても親切に私の面倒をみてくださった。奥様を紹介してくださったが、なんと日本人としてはこの上もなくきれいな十六歳のかわいらしい少女だった！(159)○○○○○○○

は私のアメリカ的で野蛮な西欧風の考えなのだろう。

9・2・11条　上125

。ミカドが日本一巡の行幸（明治天皇東北地方巡幸）に出発なさるので学校はお休みだ。私たちも授業を休むことにした。富田夫人が御成街道〈天皇の通る道〉にある、おじ様の診療所へ行って行列を見ようと誘ってくださった。（中略）途中で大勢の人に出会ったが、皆陛下を見に行くのだった。（中略）私たちは二列になって進んで行ったが、兵隊たちが皆じろじろ見るので、「両側に並んだ人たちの間を打たれながら進む囚人」のような気持ちだった。ちょうどその時、私たちの車が急に止まると、杉田先生のお弟子さんが近づいて私たちに手招きをした。車から降りるか降りないうちに、およしさんが人々や馬や兵隊をかき分けて出て来て迎えてくださった。若い武さんはすぐうしろにいて、いつものように愛想よく「いらっしゃい」と言った。次に杉田夫人が私たちの手を握り、少し奥に引っこんだところにある小さな建物に私たちをせき立てたが、その建物の外観は洋風で、内部は日本風になっていた。あのいかめしい兵隊たちの前で、このように大事にしてもらってうれしかった。兵隊たちも、この外国人たちが、自分たちの同国人、それも立派な人たちに愛されていることがわかっただろう。杉田家の紋章は誰でも知っているし、知らなくても、私たちを迎えた人たちの上品な美しい顔から、彼らが良い家柄の人だということは誰にでもわかるだろう。かわいそうに深窓育ちのおやおさんは、こんな人込みの中へ出ることがあまりないので、馬や人々におびえてしまった。どうすることもできずとまどっているのを見て、母が手を取って連れて行った。

9・6・2条　上195 196

。今朝杉田夫人が、優雅な贈り物を持って来てくださった。（中略）それから、ヒラガナで書いた小さな文庫本と本棚をいただいたが、私はとても気に入った。杉田夫人は本を並べてくださって、私が喜ぶのを見てお笑いになった。

9・12・23条　上291

。それからお化け遊びをしておどかし合ったが、六蔵ちゃんはとてもおどけて、古代の勝利者のように扇子を高く頭上にかかげて片手をうしろにやり、片足をもう一方の足の前に出して暗い隅から急に飛び出して来た。長い袂（たもと）が軽やかにうしろになびき、陽気な丸顔から漆黒の髪の毛が風で持ち上がるさまを月光のもとで見ると、実にあどけなく美しかった。

10・7・17条　上387 388

。昼食後に、杉田家に出かけたが、途中でおみやげとして外国の西瓜を買った。家族全員在宅で、武さんが、どちらかといえば(154)○○お痩せになったようだが、前とほとんど変わらぬ姿で入って来られ、ご病気のことと、これまで聞いたことのないような事柄について話し始められた。胸の病気のほうはよくなっておられるが、そのほかいろいろのことがあったらしい。武さんのお母様は、武さんが箱に入れられて帰って来ると思っていらっしゃったという。武さんのお友達が心配して福沢氏に手紙を書き、福沢氏がお母様に武さんの喀血のことを話されたのだ。しかし今は快方に向かっていらっしゃる。

10・8・21条　上402

。十八歳の弟さんが入って来られたが、初めて私たちに興味を持たれたようだった。やはり青白い顔をしているが、武さんよりずっと男らしい感じの方だ。このほっそりとした黄色人種の若い人たちの中に混じって床に坐っていると、太った手足と短いむちむちとした指を持ち、右頬に小さな腫れもののできた幅広い丸顔をした自分が「巨人」みたいに感じられる。

10・8・21条　上404

。私たちがわびしくそこらを歩きまわっていると杉田武氏に呼びかけられた。主に兵隊だが、暇な群衆にじろじろ見られていたので、武さんが救いの光の精のように思われた。武さんは、母に会ったので、ご親切にも迎えにきてくださったのだった。そこは小さなぱっとしない日本家屋だったが、杉田先生ご夫妻と盛と六蔵に迎えられ、群集のさらしものになっているところから救ってもらってほんとうにありがたかった。最初は大勢の人が玄関のまわりに集まって来たが、武さんが巧(154)△△△△△△△△△みな言葉遣いで彼らを恥じ入らせて追い払ったので、迷惑なことはもうなくなった。

10・9・13条　上416

。食後に結婚衣装を見せていただいた。三枚あって、一枚は黒地に深紅の桜の花と白い梅の花の刺繍があった。もう一枚は地味なねずみ色の縮緬で、いろんな花や鳥や花瓶が刺繍してあった。あとの一枚は白地に金の縫取りがあった。どれもすばらしく美しいものだった。よしさんと私はこの着物を着せてもらって、貴婦人のようにお辞儀をしたり、(159)○○○○○○○○○気取って微笑したりして部屋の中を歩きまわった。

10・11・19条　上424

。徳川様のご令弟、若い田安公は謹厳な二人のお伴を連れて来られた。その他、はにかみやの林（恒五郎）氏の顔、およしさんの控え目な上品な姿、六蔵ちゃんの快活な黒い目、村田氏の背の高い気品のある姿などが、私たちのきれいな客間に見られた。私は村田氏の優雅な物腰に魅力を感じる。今は指をけがして三角巾で吊っておられるが、高貴な海軍将校である。

10・12・24条　上446 447

。ひどい雨だったが杉田先生のところへ行ってみると、皆そろって待っていてくださった。お逸も。そこからまっすぐに、大橋屋という浅草の大橋近くの大きなお茶屋に行った。（中略）私たちの部屋は三階で、新しい清潔なところだった。すてきな日本料理をご馳走になり、（中略）そのあと一室で二、三のゲームをした。畳が柔らかくて、部屋に何も置いていないので、目隠し遊びをするのに、もってこいの場所だった。武さんは鬼が好きで何回も鬼になった。六蔵にぶっつかったり、屏風を抱えこんだりしているのは、なんともおかしかった。一度私が彼の広げた腕につかまってしまったが、その腕の骨ばって固かったこと。賑やかに楽しい時を過ごして、上機嫌で家に帰ってきた。

11・4・20条　上527

。昨日杉田家の人々が、今日の一時に永坂（麻布）のお稲荷様（竹長稲荷）のお祭見物に招待してくださった。（中略）長坂に着くと、玄関で皆が待っていて、快く迎えてくださった。（中略）戸口には杉田夫人がやさしく笑いながら立っておられた。明るい、ものやわらかな目がすばらしく若々しかった。両側には背の高い息子さんたちがかしこまって立っていたが、目はキラキラしていた。一段下がったところで、赤い頬をしたおよしさんが、赤とピンクの縮緬に薄ねずみ色の絹物を着た小さなカーちゃんを抱いていて美しかった。しかつめらしい家来がその反対側に、使用人たちが、前に坐っていて、ばら色の頬のおやすや斜視の女中とこれも女中で刺繍の上手な藤色の着物を着たきれいな女の子もいた。武さん、お祖母様、その他大勢に、富田夫人もスーちゃん（真男）を連れてきていた。お辞儀、挨拶、せんだってのお礼、適当なことばを添えながら贈り物の贈呈にしばらく時間をかけてから、少なくとも十

五年はたっている古い写真を見せられた。一つは昔の習慣に従って(152)○○○○クリクリ坊主○○○○

(162) 杉田（元良）勇次郎（津田　仙《学農社農学校開設者》弟子）――→（55）岡田松生　16・2・16条　下449

(163) 図師民嘉（村田一郎従兄弟）

。村田氏の従兄弟で、ヨーロッパとアメリカの旅から帰国されたばかりの図師氏が午前中来られた。母が出かけていたので、私がお相手をしなければならなかった。良さそうな人だが、あまり頭が切れるとは思えない。(163)○○○○○容貌は立派だ。第五国立銀行（？）に勤めている。蠣殻町の家に遊びに来てくださいと言われた。　11・9・23条　下48

(164) スペンサー、マチィルダA嬢（海岸女学校・東京英和女学校〈聖書・英語・音楽〉教師・宣教師）――→（38）ウッド（英国公使館守衛）

(165) スミス、ロバート・ヘンリー（開成学校・東京大学〈機械工学〉教師）――→（198）ディクソン、ウィリアムG（工部大学校〈英語・英文学〉教師）　（200）同令妹　（201）同令母

。ディクソン氏とマーシャル氏に昼食に招かれていたので、母とウィリイと私は十二時にディクソン氏のお宅へうかがった。（中略）初めはぎこちなかったが、昼食がすんで客間に移り、美術品などを見せていただいているうちに打ちとけてきた。アルバムにディクソン氏のお母様――(201)○○○○○○○○とても美しい立派な老婦人――のお写真があった。ミス・ディクソンは十八歳で(200)(198)○○○○○○○○お兄様似のきれいな方だ。ほかに少女が二人と青年が二人いた。それからロバート・スミス氏の(165)○○○○○○○○○○○○着物姿のなんとも言えず感じの悪い写真もあった。ディクソン氏も袴に刀をさした写真があったが、(198)○○○○○○○○○○○○○○○○いかにも悪いことをしているような顔つきだった。　11・5・22条　上545

(166) ソーパー、ユリアス（耕教学舎設立者・宣教師）　（167）同夫人――→（213）富田鉄之助（第二代日銀総裁）夫人縫

(243) ハリス、メリーマンC（東京英和学校教師）夫人

。会衆全員で歌を歌ったあと、ソーパー氏が立って、(166)△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△いつものように大声のお説教調で話しだした。スピーチをさせられるとは思わ

なかった、と言われたが、それは日本語の間違え方からも明らかだった。(166)△△△

ピーターV（開成学校・東京大学〈物理学・数学〉教師）令嬢ガシー

(170) 高木三郎夫人

。高木夫妻とお逸と富田夫人が夕食にみえた。高木氏は相変わらず話し好きで、くったくのない様子である。ニューヨークとサンフランシスコに合計十年もおられたので、アメリカの生活は隈なく見て来られた。高木夫人は(170)きれいな若い人で、俗語もこなして英語を自由に話す。服装は流行の先端をゆく。(170)まるで英語圏の人のように「グッド・グレイシャス」とか「オオ・マーシィ」とか「ナット・マッチ」といった感嘆詞を使う。その上ヤンキーの真似をして「アイ・ゲス・ソー」などと言う。

12・1・7条　下125 126

。富田氏は高木三郎氏の奥様がきらいなのだが、高木夫人を好きな日本人はほとんどいない。高木夫人は(170)傲慢で、ご両親がみえた時でも、自分は椅子に腰掛けて、ご両親は床に坐らせていた。勝家を訪問した時も、お互いにお辞儀をして「ゴキゲンヨウ」とか「ハジメマシテ」とか「ドウゾココロヤスク」とかいうことばを勝氏のほうで言われたのに対して、彼女は形式的にお辞儀をするだけで、返礼のことばも言わず、三郎氏のアメリカ行きの費用を勝氏が出しておあげになったお礼も言わなかった。

12・1・20条　下135

(171) 高木貞作（商法講習所助教）　(172) 同夫人

。高木氏はテーブルの下座に坐って飲み続け、そのうちに顔はゆでた海老のようになった。私たちのところにもやって来たが、(171)ろれつがまわらなくて、何を言っているのかわからなかった。私は「どうしてそんなに青い顔をしていらっしゃるの」と言った。高木氏は(171)笑って「相当赤い顔をしているのでしょうな」と言った。私は「桃の花のようですよ」と答えた。しばらく中休みがあり、噴水や小さい滝が流れている庭に出た。（中略）高木氏がほんとうに(171)真っ赤な顔で出て来たので、私は心配だと言った。

11・3・12条　上503 504

。もう四時で、待たせてはいけないから、高木氏のところへ急がなくてはならなかった。「高木さん」を探して、浅草中人力車を走らせた。（中略）高木氏の家を何度か通り過ぎてから、高木氏自身が出迎えに出ていらっしゃったので、やっとわかった。中に入り、二階へ上がって、結婚のお祝いと家庭用品を全部見せていただき、持って来た贈り物を出して挨拶を述べた。高木夫人を紹介していただいたが、[172]○○○

上座を占めた。それから家族がやって来て紹介された。滝村夫人はきれいな方——本当に〈日本の既婚婦人にしては〉格別美しい方で、お嬢さんのこまつにとてもよく似ていらっしゃった。お祖母様、つまり滝村氏のお母様がいらっしゃって、お辞儀をなさり、大変丁寧な言葉づかいで口早にお話しなさった。たぶん六十五か七十歳ぐらいでいらっしゃるだろう。とても美しい方で、雪のように白い髪は、これ以上考えられないほど巧みな小さなお下げにしてうしろでまとめてあった。きらきらした黒い目は非常に大きくて、丸い慈愛に満ちたお顔には、大変知的な表情が浮かんでいた。

10・1・19条　上308 309

。ものものしい態度の従者や護衛たちが、一番品位のあるサンミサマ（三位様）のまわりにはべり、両側と道には使用人たちが並んでいた。私たちを見ると、いかめしく恐ろしいサムライ全員が深々とお辞儀をした。使用人たちの頭は地につきそうなくらいだった。その数といかめしさに恐れをなして、私が母のうしろに隠れているうちに、お辞儀と挨拶が終わった。そしてたくさんの厳粛な顔の中から、滝村氏の親しみ深い顔が現われ、聞きなれた声がどうぞお入りくださいと言った。

10・2・17条　上323

。お逸が食事に残って、そのあとみんなで少しお裁縫をしてから滝村氏の家に行った。（中略）ハンサムなお祖母様は以前と少しも変わっておられないし、丁重である。滝村夫人も相変わらず美しくお元気である。子供さんたち——おすみ、おはた、おしげ——も部屋に入って来たが、滝村氏は気を遣って心配ばかりしておられた。子供さんたちに誘われて、庭の梅や松の木を見に行き、通りの向かい側の薬屋まで出かけた。もとの部屋に戻ると滝村氏がお手製の一弦琴を取り出して見せてくださった。とても立派な楽器である。彼はあらゆる音楽が好きで、琴や月琴のほかに、笙のようにむせび泣くような悲しい音を出す古い笛を持っておられる。すてきな食事をご馳走になったが、滝村氏たちは、とてもお粗末なもので、差しあげるのは恥ずかしいというようなことを繰り返しおっしゃった。（中略）食後の音楽もすばらしかった。お逸が月琴を弾きながら歌を歌い、滝村氏もこれに合わせていい声で歌った。そのうちいつか一弦琴を家に持って来てくださるそうだ。

11・3・11条　上498 499

。馬、猫、獅子、狼、狐、蛇などいろいろ見たいものが出たが、武夫は大胆に人間が見たいと言った。田安公は獅子が見たいとおっしゃり、お付きの者は猫と言った。これが終わるとジェイミーは森田をつれて行き、敷物ですっかりつつみ、頭に新聞紙をかぶせ、目だけ残した。それからみんなが呼び入れられ、目だけみて誰かあてるようにと言った。むろん成功しなかった。グルグル巻きの格好といったらなく、武夫はじっと眺めてから「ウゴキマスヨ！」とささやいた。(177)△△△△△とうとう紙が取られ、森田は「ヤーヤー」といって飛び出して、一同を驚かせた。

12・12・25条　下391

(179) ダグラス夫人

。花を買いに花畑へ行ったが、ダグラス夫人の態度はひどかった。(179)○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○何かいやな臭いでもするかのように、鼻を上に向けて歩きまわり、(179)△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△思いつけばどんな不愉快なことでも私に通訳させようとした。訳すのは構わないが、たとえどんな相手にでも乱暴な言葉を使うのは、私は大嫌いだ。

10・8・7条　上400

(180) 竹下寅吉令妹——→(27) 上杉茂憲（侍従・伯爵）

。大鳥家のおひなさん、おゆきさんの二人が四時頃に竹下さんというお友達を一人連れて来た。竹下さんのお兄様の寅吉さんは商法学校の学生だということだった。(180)○○○○○○○○○○○○○○○感じのいいお嬢さんだったが、招かれていない友達を大鳥さんたちが連れて来たのは、礼儀に反する。少なくともアメリカでは失礼になる。

10・12・28条　上449

(181) 竹村謹吾——→(43) 大久保三郎（一翁令息）

。食後、「ロト」をしに行った。大久保氏が「教え子」だったが、私はやり方がわからないので、大久保氏の隣に坐った。大久保氏は私に教えながら、数を合わせた。徳川公は上機嫌で、竹村氏はその滑稽な話しぶりと動作でみんなを笑わせどおしだった。(181)△△△△△△△いうまでもなく徳川公が勝った〈どうしていつも勝つのかしら？〉。そして徳川公が勝ったところでゲームは終わり、八時を過ぎていたので、私たちは帰る仕度をした。

10・2・17条　上328

(182) 田中（勝家家扶）——→（55）岡田松生　（246）疋田正善

。昨日、ミス・ホアは、田中は哲学的な顔をしていて、[182]孔子の絵のようだとほめていた。だがこんなことを聞いたら、あの年寄りは有頂天になってしまうだろう。　12・5・12条　下215

(183) 田中不二麿（文部大輔）夫人スマ

。三時に、すてきな車が家に着き、田中不二麿夫妻がみえた。田中氏は文部大輔（次官）で、ビンガム氏と非常に親しく、それで近づきになったのだ。奥様（スマ）はもと歌手で、[183]とても美しく、英語も上手なすばらしい方だ。アメリカに行ったことがあり、[183]感じの良い方だ。同行の通訳を通じて、私が日本語が上手だと聞いたから、日本語で話して欲しいといわれた。私は奥様の英語の知識が豊富なことをほめた。（中略）二人ともとても良い方たちだ。　12・6・9条　下233

。私たちは田中不二麿夫妻もお訪ねした。ご夫妻ともご在宅で、とても愛想よく迎えてくださった。（中略）おいとましようとすると、お暑い中を遠路おいでくださってありがとう、またおいでくださいと言われた。とても愛想のよいご夫婦である。ご夫妻のご経歴はとてもロマンチックだと思う。ダイミョウだった田中氏と初めて知り合った時には奥様（スマ）は京都の有名なゲイシャであった。そのうちお二人は結婚し、当然の成り行きだが、芸妓と結婚したというので田中氏は高い地位から追われた。そしてこのことで財産は失ったが、妻という宝を得た。夫人は勇気ある方で、現在のように夫が権力をもち偉くなるまでずっと芸者の職業を続け、二人の生活をたてられた。田中氏は妻の昔の貞節に対し尊敬と愛情で報いておられる。奥様は今、本当に立派な奥方で、[183]小太りだが色白で、物腰が静かで、芸者にありがちな冷たさなど全然ない。　12・9・6条　下324

(184) 種田誠一　(185) 同夫人——→(27) 上杉茂憲（侍従・伯爵）　(180) 竹下寅吉令妹　(328) 横山（美国聖公会宣教師）

(186) タミ（富田家使用人）

。月曜日の朝、富田夫人の家へ行って、おすしの作り方を教わった。ご飯を炊き、野菜、海苔、蓮根をきざんで、オシタジとミリン

をかけた。おツネが床にござをしき、私たちはかまどの前に坐っておすしを作った。とても面白かった。雇い人のタミが(186)○○○○剽軽な顔を勝手口にのぞかせて「お嬢さんはよい日本のオカミサンになりますよ」と笑いながら言った。(186)△△△△△△△△△△△

(187) ターリング、チャールスJ（東京大学〈英国法〉教師）

。木曜の夜、YMCAでとても良い会があった。ターリング氏がテニソンの「眠れる美女」を朗読したが、(187)△△△△△△△△△△△△△△△△△△△合っていて非常に効果的だった。

(188) チャプリン、ウィンフィルドS（開成学校・東京大学〈土木工学〉教師）——→(278) ホイットニー、ウィリアムC令息ウィリイ（クララ令兄）

。陛下は車から降りられ、壇のほうに進まれた。人々は一斉に脱帽した。その時に、うしろのほうから群衆がどっと押してきた。みんな何とかして一目陛下を拝もうと必死になっていたのである。きゃしゃな柵は倒れてしまい、女一人と子供一人が投げ倒された。警官は夢中になって叫びながら群衆を制止しようとして警棒を振りまわしたが役には立たなかった。チャプリン氏とウィリイがいなかったら、母も、お逸も、私も、あの女の人や子供と同じ目にあうところだった。(188)(278)○○○○○○○二人が強い腕と強い肩でもって、群衆を押し止めたのである。ようやく秩序が回復されたので、私たちはじっとしていた。

(189) チヨ（ホイットニー家使用人）

。新しい女中のチヨは行儀のよい子で、(189)△△△△京都弁が面白いがわかりにくい。お逸でもチヨの言うことはなかなかわからないし、笠原もわからない。チヨは東京弁よりずっと楽だと言う。東京では私のことをお嬢様というが、京都ではお姫様という。水とは絶対に言わないで、お冷やという。早く京都弁を習いたいと思う。

(190) 朝鮮公使（皇太子令息〈具名不詳〉）　(191) 朝鮮副公使（宰相令息〈具名不詳〉）

13・1・7条　下405

12・5・10条　下213

10・11・30条　上434

11・3・25条　上518

。きのう私たちは朝鮮の公使たちにおもてなしをした。お客は五名で、明るい色の紗のような布地の服を幾重にも重ねてある特有の民族衣装をつけて、背丈が高く立派な容姿の人たちであった。[190][191]○○○

。津田氏は(192)○○○○○○○○ひどく謹厳であるかと思うと急に陽気になる。「文明に触れる前はシャツを着ないで風邪をひかなかったが、今ではシャツを着ないと風邪をひく。昔は靴でなく下駄を履いていたが、今では下駄を履くと転んでしまう。昔は帽子をかぶらなかったが、今では帽子を忘れると頭痛がする。これが進歩なのでしょうが私には不便なことです」と言った。すると一人の学生が、「先生、それはちがいますよ。帽子をかぶらないと頭痛がするのは進歩のせいではなく、先生は髪の(192)○○○○○○○○○○○○毛がおありにならないからですよ」と言ったのでみんな大笑いだった。それからお辞儀をして先生といっしょに帰って行った。

12・3・30条　下162

。津田氏はおやおさんの話をして、まだ結婚には若すぎると言った。「孔子の教えでは男は三十、女は二十が適齢です。もっとも孔子自身は十九で結婚しましたがね」それでは孔子は自分の信念を実行しない間違った人ではないかと思ったら、津田氏が(192)○○○○○○ケラケラ笑って、自分が早婚だったからこれはいけないとわかって、早婚はやめるように説いたんでしょうと言った。

12・4・11条　下181

。夕食後、津田氏が奥様をつれてこられた。奥様は(193)△△△

姓さんそのものだった。シュウは津田氏は(192)○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○大きく赤くてデコボコしていて苺みたいだと言った。　12・6・6条　下231

。津田氏と合流するために、古川でとまったが、例のとおりまだ仕度が済んでいなかったので、長いこと待たされたあげく、広尾で待つと約束して先に行った。あの美しい菖蒲園（笑花園）でブラブラしていると、遅刻常習犯が(192)○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○汗をかき赤い顔をしてやってきた。洋服を着こんできたのだが、(192)○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○スネはズボンのすそから丸見え、チョッキの下の麻のシャツのおなか(192)○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○の部分がとび出し、カラーがちゃんと留めてなかったので横にずれて、蝶ネクタイが左の耳の下にきてしまい、まるでいたずら子猫のような有様だった。(192)○○○○汗をかき△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△はあはあいいながら、展示してある植物を説明してくださった。広尾からの道は森のように木の多い所を通っていて、道幅がせまいのと、時々急勾配のところがあるので、車を降りてかなり歩かなくてはならなかった。おかげでじきに津田氏のように暑そうな様子になった。津田氏のほうはといえば、きつい靴にもかかわらず、坂を上がったり下りたり、辛抱強く歩き、哀れな虫や蛇を殺したり、木の葉や枝を折っては、長々とその性質や効用などを話してくださった。大体英語で話をしたが、夢中になって急いで説明しようとするあまり、(192)△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△動詞も名詞もごちゃまぜの目茶苦茶になり、(306)△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△英語をもっともよく知っている村田氏が助け舟を出していた。　12・6・11条　下234 235

(195) 鶴（ホイットニー家使用人）

。三浦夫人が今朝女中を連れて来てくださった。お鶴〈鶴は長寿と幸せの印だ〉という名の十七、八歳のおとなしそうな娘だ。名前はロマンチックだが、(195)○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○丸い間の抜けたような顔と、半開きのひっこんだ眼は鶴の連想を破壊する。この娘はずっとうちにいてくれるのだ。父親は以前は刀鍛冶だったが、今では皇室用の盃を作っている。　10・11・28条　上430

(196) テイ（ホイットニー家使用人）

。今朝夢中で仕事をしている時、テイが熊本へ行くことにしたという話を聞いてびっくりした。（中略）生まれつき臆病で気迷いする

質だから、今度つくという兵隊の職務は合わないという気がする。最初の交戦で撃たれないにしても、騒ぎと混乱で死ぬほどおびえてしまうだろう。ああ、テイさん、血なまぐさい戦場で手柄を立てるより、家で静かに坐っていたほうがあなたのためにずっといいのに。しかし、一番困るのは、テイの仕事全部を私がしなければならなくなるだろうということだ。私は家事が好きだから、それもいいことかも知れないが。一日中テイは悲しそうで、沈んだ顔をしていた。[196]○○○

違ったことをしたら肘でつついて注意してほしい、とウィリイに言った。プディングが出たら、気味悪そうに、これはなんです？と尋ねた。まるで私たちがとっくに絶滅した野蛮人でもあるかのように。夫人のこともとてもひどいこと――女の耳に入れるべきではないことを言った。奥さんは子供が生まれてからよけい大食になったので、彼の払うホテルの支払いがさぞ高いだろうなんて。なんてひどい人。ディクソン氏とつい比較してしまうが、ディクソン氏はまるでちがう。紳士的で、善良で、上品である。(198)○○○○○

11・5・4条　上536

。ディクソン氏はスコットランドの詩を朗読してくださり、(198)独特のアクセントをつけて歌ってくださったが、「リールの国」は特に哀△△△

アメリカの民謡やイギリスの民謡を歌った。

11・6・18条　上573

。帰り道で麻布坂を下りて来るディクソン氏を見かけたが、知らん顔をして通り過ぎようと思った。だが彼は足を早めた様子で、道の分岐点の大きな木のところまで来た時に呼びとめられてしまった。しばらく立話をしてから、私の人力車の横にくっついて工学寮まで歩いて来られた。(198)○○○○○○○○○○○とても陽気でお話好きで、来週の火曜日に予定されている富士山についての講演に招待してくださった。そのお返しに、私は、ヘップバン夫人から彼に伝えて欲しいと言われていたこと――横浜のアジア協会での彼の講演が大変面白かったこと――を話した。彼は夫人を深く尊敬しているので、夫人にほめられたことはとてもうれしいようすだった。いろいろお互いに(198)△△△△△△△△△など言って別れ、私は家に帰った。

11・6・22条　上583

。ディクソン氏はスコットランドの民謡などを歌った。(198)△△△△△△△△△

。ディクソン氏は高い声でそれが「ヨロシイキカイデアル」と吹き込んだ。あとで私に何と言ったかわかったか、ときいた。(198)△△△△

11・10・8条　下62

。昨晩は、蓄音機や電話についてのユーイング先生の講演を聞きにＹＭＣＡに行った。（中略）昨夜の会には大勢の人が来ていたが、大半は宣教師団に所属する独身の女性であった。これらの女性は、青年の集会でも祈禱会でもなんでもぞろぞろ出かけて行き、ディクソン氏に憧れの眼ざしを向け、彼が微笑すると笑い、彼が真剣な顔をするとセンチメンタルな表情をするのは実に滑稽だ。(198)○○○○　(198)○○○○○○○

11・11・27条　下94

。ディクソン氏と私が『古今の歌』の中からやさしい歌を合唱して、さかんな拍手を受けた。男女の合唱は珍しいらしかった。ディクソン氏はバスなので、私のソプラノに合わせるのは難しく、私はテノールと合唱するほうがうまく歌えるのだが、皆さんは良い合唱だったと言ってくださった。(198)△△△△

12・1・25条　下138

。今晩はミス・ホア、マーシャル氏、ディクソン氏がいらっしゃり、とても楽しかった。ディクソン氏は病気はすっかり治ったが、まだやつれた様子だ。(198)○○○○○○○

12・7・2条　下246

。工部大学校のきら星のごとき教授陣に新たな星が加わった。ディクソン氏の弟のジェームズ・メイン・ディクソン氏が、きのうボルガ号でようやく到着したのだ。今朝、教会に行く途中の二人に会ったが、弟さんのほうは背の高いお兄さんに比べてとても背が低いことしか見るひまがなかった。教会で彼は私たちの前に坐ったが、黒いちぢれっ毛の髪と色白で細面の心配げな顔つきしか見えなかった。(198)○○○○　(199)○○○○○○○

かりで、(198)○○○○形よい指で靴のひもを結んでくれるディクソン氏のような騎士はいなかった。

12・11・8条　下344

。アンガス氏も、トルコでイギリスとロシアの戦闘が再燃しそうな話をし、ディクソン氏は「帰国したとたん、入隊ということになるでしょうね」と言うので、私はぎょっとした。すると母が「あなたが行ってしまわれることなど考えたくありませんわ」と言った。「僕も考えたくはありません。でもいずれその時は来るのです」見上げると、(198)○○○○○○○○○○○○○○彼の澄んだ目には涙がにじんでいた。

12・11・11条　下353

。今夜、ディクソン氏はいつもより早く、(198)○○○○疲れた様子でいらっしゃった。客間で長い間母と話をしておられたが、私はお目にかかりたくなかったので、食堂のストーブのそばにずっと坐っていた。

12・11・23条　下359

。ディクソン氏は、女の宣教師は時間の観念がまるで無いので驚くと言った。お母様の美しい写真を見せに持ってきてくださった。(201)○○○○○○○○○○○○○○

し大きい子供たちは食堂に入れた。ディクソン氏はとても面白がって、それぞれの部屋に行くたびに戻ってきては「これは面白い」とささやいた。(198)△△△

。陛下は馬車の上席に坐られ、二人の高い位の将校か皇族かが反対側に坐っていた。お顔を半分こちらに向けられ、瞑想にふけっておられるかのように眼を伏せていらっしゃった。もっとお若いのだそうだが、三十歳ぐらいの感じで、お顔立ちは美しかった。例えば大原氏という若いサムライほど美男子ではないが、冷たい感じは全然なかった。しかし、国民よ、あまりじろじろ見るなと思ってでもおられるかのように、とても疲れていらっしゃるご様子だった。

9・6・2条　上197

。陛下は天幕をお出ましになり、私たちの真ん前をお通りになった。手をのばせばさわれるほどの距離であった。数人の偉いお役人が陛下のまわりにいたが、その真ん中にあって、誰よりも背の高い陛下は、一人で歩いて行かれた。金の縫取りのある軍服に、白いズボンといういでたちであった。（中略）天皇は私たちのすぐそばで足を止められて、外国の公使たちにお辞儀をされたので、私たちはうれしくなってしまった。陛下が脱帽されたのを見ると、口ひげを残してあとはきれいに剃っておられ、髪も短く切っておられた。若い日本人によいお手本を示しておられると思った。

10・11・30条　上434 435

。ベイリー氏も同時に天皇陛下に拝謁なさった。「陛下は立ちあがると、聞きとりにくい無愛想な声で、短いスピーチを読まれるんですがね、まずわかる人はいませんね。あんな奇妙な声は聞いたことがありませんよ。芝居がかって不自然なんです。とにかくなにを言われたのかわからないので、お辞儀をして、『御言葉まことにありがとう存じます』といって退出しましたよ」

12・4・29条　下198

。輝かしい皇室の行列が近づいた。先頭にフランスの軍服を召した天皇様が歩まれた。最初天皇様とはわからなかったが、写真から想像していたより、ずっとご立派に見えた。背丈は約五フィート八インチか、多分もう少し低いかもしれない。お顔の色は明るいオリーブ色でやや重厚なお顔立ち。お顔には小さい山羊ひげと口ひげがあり、快活で温和な表情をしておられた。陛下は公使とその夫人たちと握手をされ、通訳を通して彼らの礼儀正しい言葉を聞かれると優雅に頭を下げ、微笑された。ドイツの伯爵夫人にお手を差し出されると、夫人は急に身をかがめて礼をし、片方の膝が地面についてしまった。陛下がお目の前にふわふわした絹のレースをご

覧になった時、[204]○○○

に、将軍の歩みは、ゆっくりと静かであった。私の窓の向かい側を、眼を上に向けて高い木のてっぺんの方を見上げ、静かに瞑想の[208]○○○うちに歩かれる。金色の太陽は、木々の間から上向きのお顔に光を落とし、このおだやかな貴人の長い、引きずる礼服はきらきらと光った。　12・8・13条　下291

(209) ド・ボワンヴィル、アルフレッドC（工部省雇用建築師）　(210) 同夫人　(211) 同令嬢マリー

。ツリーの飾りつけをしているところへ、ド・ボワンヴィル夫人が手伝いに来てくださったが、連れて来られた赤ちゃんがむずかるので、間もなくお帰りになった。夫人はマリーには日本語しか使われないが、あんなかわいい赤ちゃんに[211]○○○○○○○○[210]△△△

(212) 富田鉄之助（第二代日銀総裁）　(213) 同夫人縫　(214) 同令息真男——→(60) 小野（報知新聞論説委員）　(157) 杉田玄端（玄白猶子・元外国奉行支配翻訳御用頭取）令息盛　(167) ソーパー、ユリアス（耕教学舎設立者・宣教師）夫人　(243) ハリス、メリーマンC（東京英和学校教師）夫人　(277) ホイットニー、ウィリアムC夫人アンナ、L（クララ令母）　(313) 桃太郎（芸者）　(314) 森　有祐

。富田（鉄之助、のちの第二代日銀総裁）氏の夫人（縫）と知り合いになった。上流階級の出で、本当に上品できれいな方だ。(213)○○○○○○○○○

8・8・19条　上34

。先週のある晩、みんなで〈みんなとは、母、富田夫人、有祐、盛、小野氏と私である〉銀座に出かけた。私たちは日本の提灯(ちょうちん)を持って、買い物をしながら笑ったりしゃべったりして楽しく過ごした。花やおもちゃをたくさん買って十時に帰宅した。(277)(213)(314)(157)(60)○○○○

8・10・11条　上65

。ヒロと日本の礼拝から帰って来て、富田夫人と話をしていたら、優雅な二輪馬車が門の方へ近づいて来た。のぞいてみると、遠過ぎて乗っている人の顔かたちはよくわからなかったが、日本人の婦人と紳士と従者が二人乗っていた。紳士は殿様だとわかったが、洋服をお召しになり、婦人は上から下まで和服でいらっしゃった。別当が膝をついて殿様からの指示を受け、富田婦人に伝えた。富田夫人はダイミョウ（大名）のお成りにすっかりあわてながら、お二方を招じ入れ、大名がまずお入りになると大変低くお辞儀をした。（中略）皆客間に坐ったが、富田夫人がぽつぽつと挨拶の言葉をおっしゃるだけで、誰も口を開かなかった。(213)△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△

8・10・26条　上72

。貧しい女や子供の群れがまわりに集まって来たが、言葉だけでなく、その汚い変な身なりはとても不快だった。私たちが歩き出すと、みんな笑ったり叫んだりしながら、ぞろぞろついて来た。非常に不愉快で腹立たしかった。その時富田夫人がそっと近づいて、守り神のようにやさしく「イエス様が」と言われた。それで十分だった。夫人の手を握りしめ、輝くその目を見つめた時、私のいら(213)○○○○○

だちは消えた。「イエス様がお歩きになると、みんなが笑ったのですよ」と夫人はお続けになった。　9・2・16条　上130

。富田夫人はあらゆる面で新しい思想を身につけようとしておられる。いつだったか、あるお寺のそばを通った時、「父があそこに葬られています」とおっしゃった。私は「ああ」と答えてから、何か言わなくてはと思って、ほかの日本人のようにお墓参りに行くの(213)○○○かと尋ねた。「今年は行ってないけれど、昨年行きました」と夫人は言われた。私がどうして今行かないのかと聞くと、静かに笑って、こうお答えになった。「そうですね、父はあそこにはいませんもの。あそこにあるのは、ちりと石だけですわ。石なんて拝むことはできません！」夫人はわかっておられるのだ。　9・5・10条　上175

。この前日記を書いた時から、私は富田夫人とけんかしている。高木氏から、富田夫人が高木氏と中原氏のお嫁さんを探していると聞いたのだ。母はすっかり衝撃を受けたが、私だってそうだ。我が家に結婚仲介人が！それで富田夫人のところへ行って、率直に本当かと尋ねた。私たちが、アメリカではそのような結婚周旋業の世話になるのは最下等の女性だけだとよく言っているものだから、富田夫人は(213)○○○○○○○○困った様子だった。最初は「いいえ」と言ったが、あとで、高木氏のためにはお嬢さんを探しているが、中原氏は(213)△△△冗談に言っ△△△ただけだと答えた。私はこのことについて富田夫人にお説教をして、私たちの学校に傷がつくから、そんな不名誉なことはここでは許されないと言って話を結んだ。　9・5・30条　上191

。大仏は、高さ六十フィート、幅はその半分の青銅の像で？年前のものである。胎内は大きな空間になっている。私たちははしごを上って、大仏の背中にある窓から外を見た。胎内から出たのち、よじ登って大仏の親指の上に坐ったが、それを見た一人のサムライがひどく不快がった。そのサムライはそのような女らしくない行為を見せないように、自分の奥さんを追い払った。富田夫人もあま(213)○○○○○○○○○○○○りいい顔をしていなかった。それから江の島に戻るため、車夫たちは軽快な早足で私たちを運んで行った。

〔九年八月、日付不詳〕　上241

（以下次号）